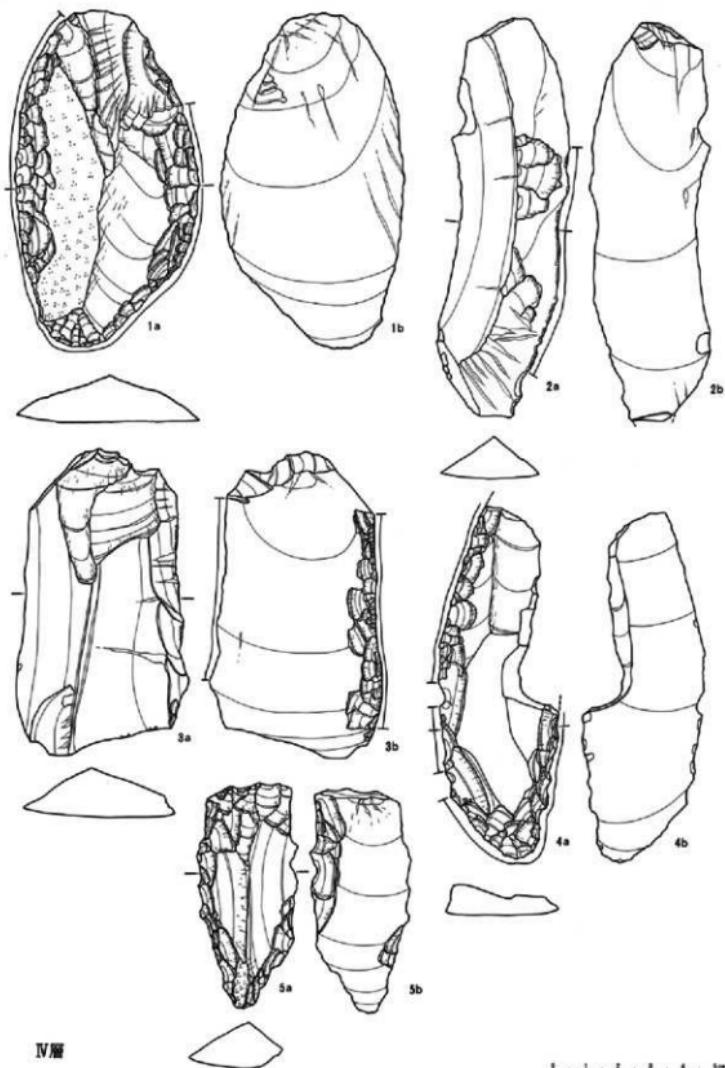
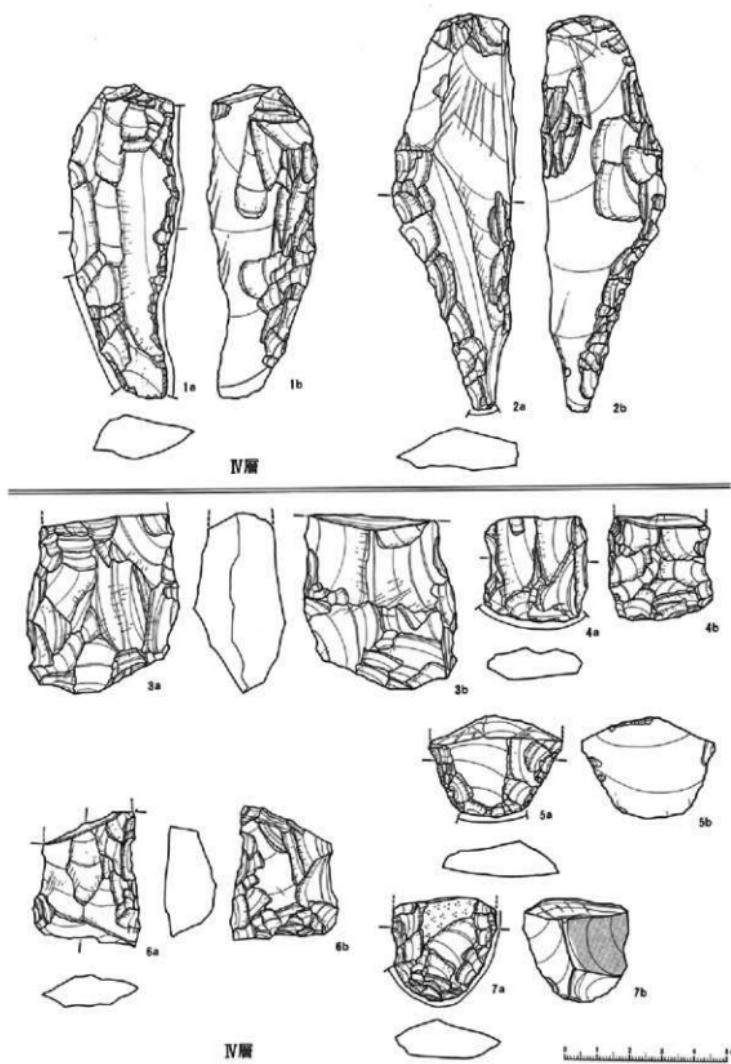


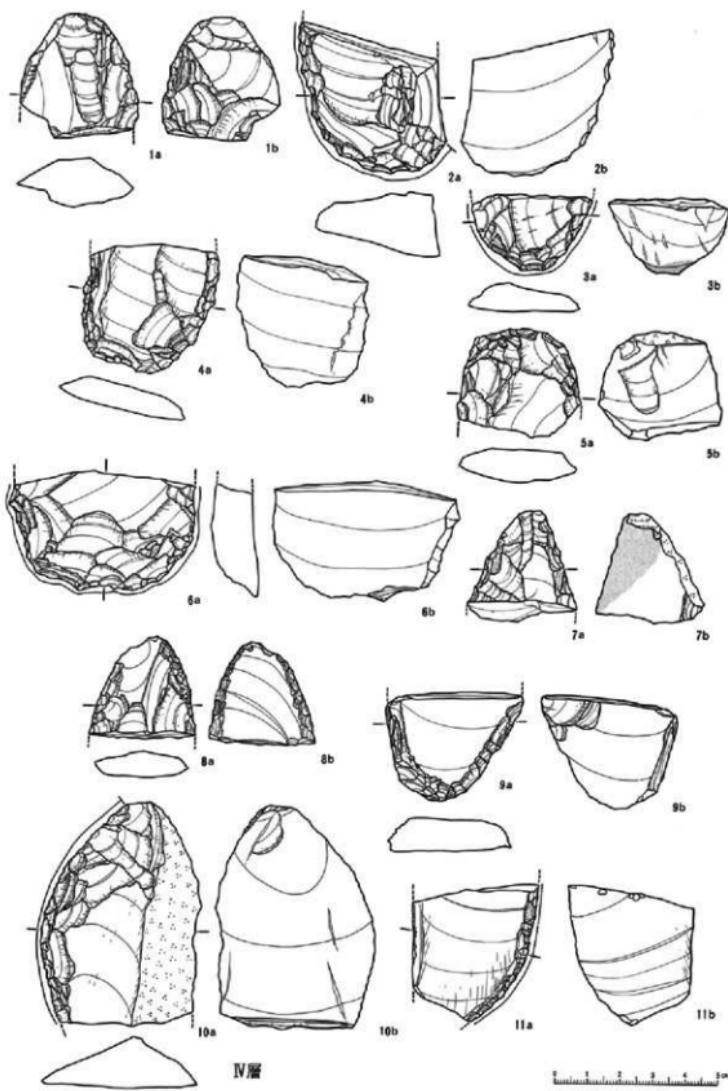
第96図八幅原No.5遺跡A区出土石器実測図35



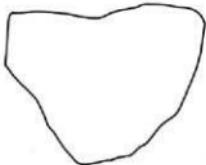
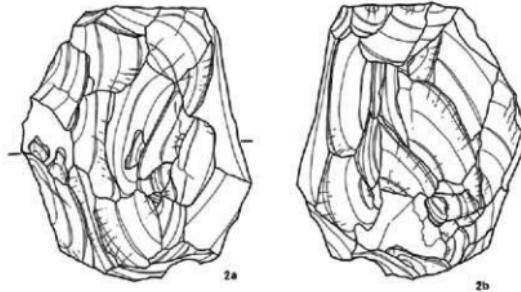
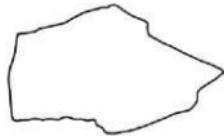
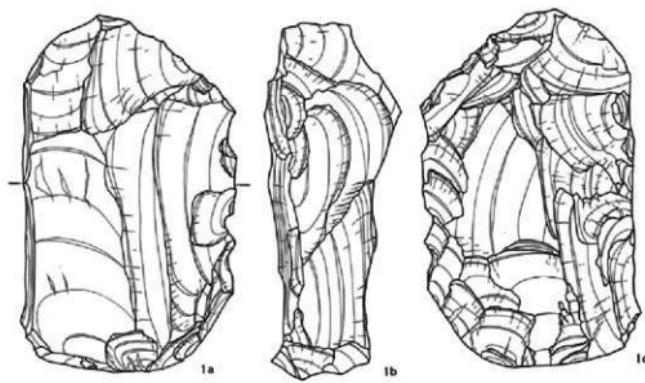
第99図 八幡原No.5遺跡A区出土石器実測図36



第100図八幡原No.5遺跡A区出土石器実測図(37)



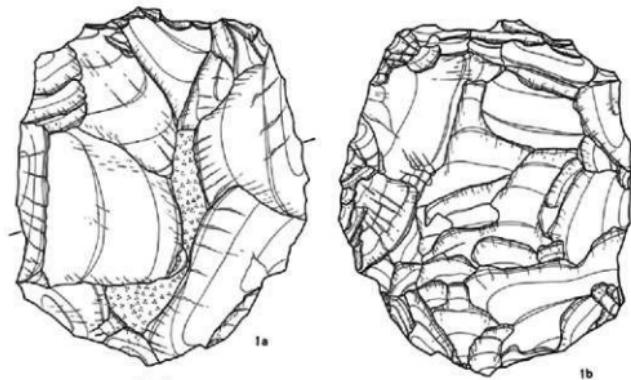
第101図八幡原No.5遺跡A区出土石器実測図3



V層

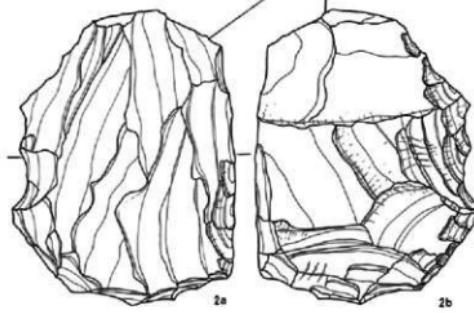
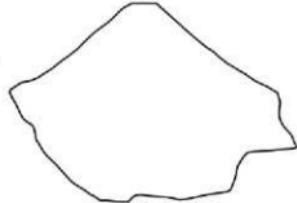


第10図八幡原No.5遺跡A区出土石器実測図39



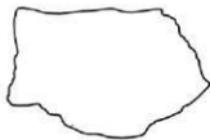
1a

1b



2a

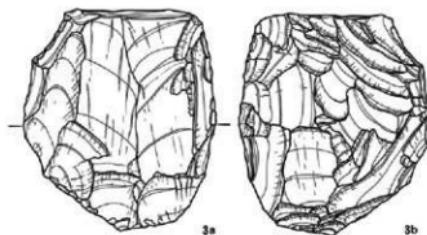
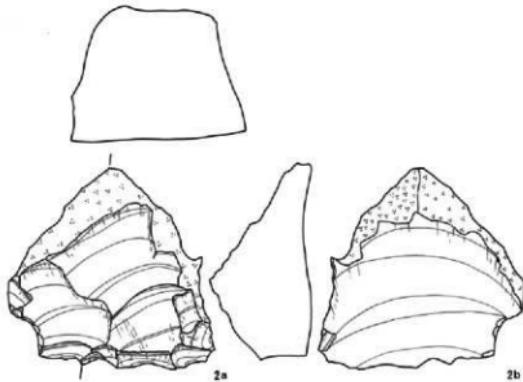
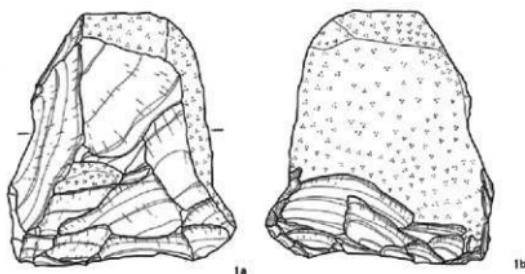
2b



IV層

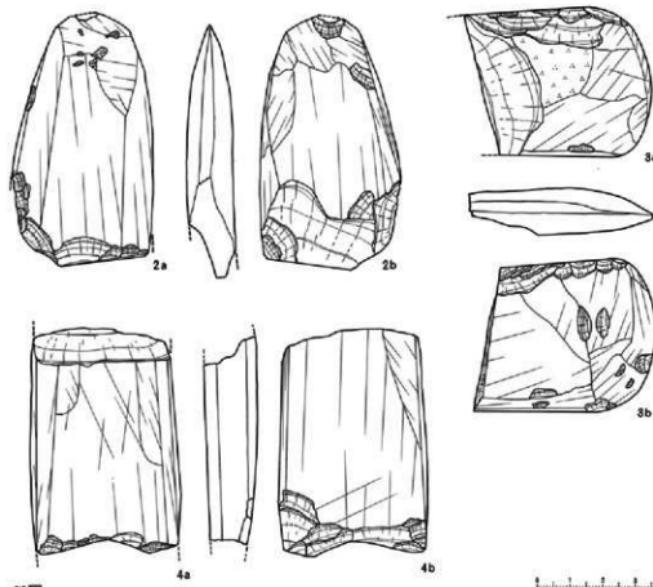
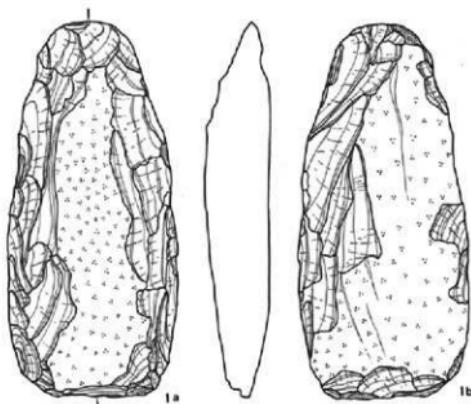


第100図八幡原No.5遺跡A区出土石器実測図(40)



IV層

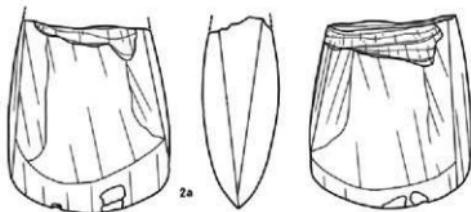
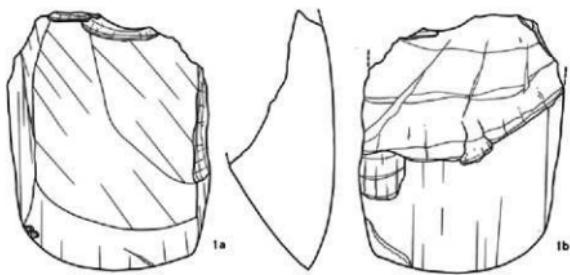
第104図 八幡原No.5遺跡A区出土石器実測図(4)



V層

第115図八幡原No5遺跡A区出土石器実測図42



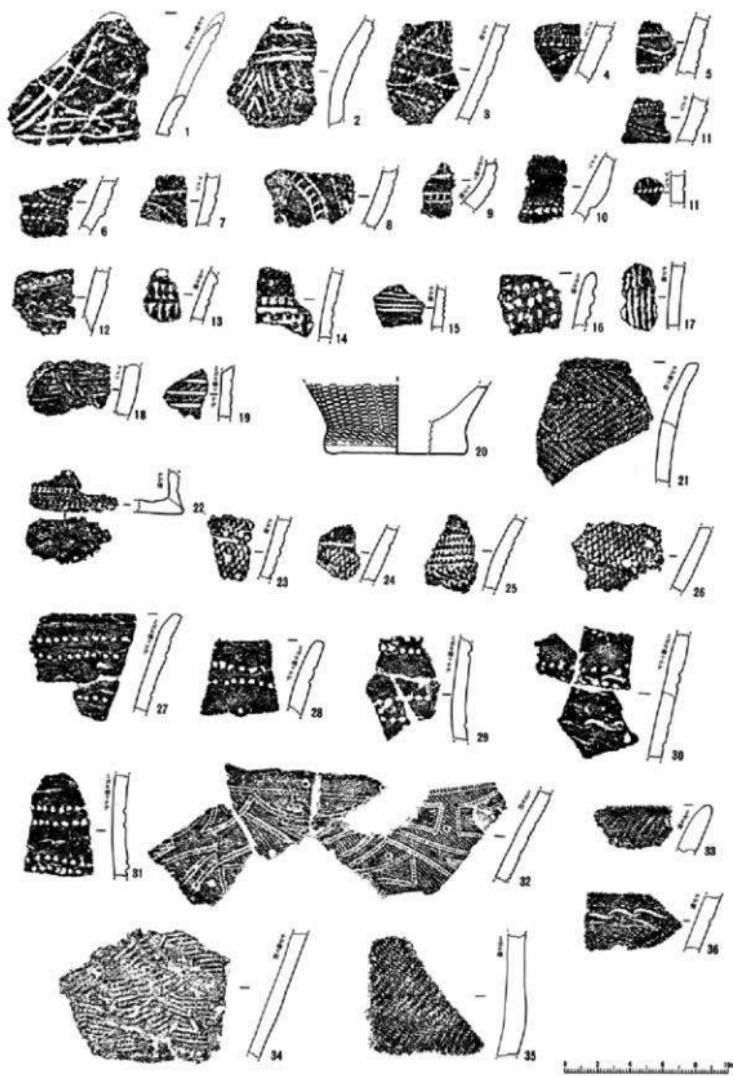


图例

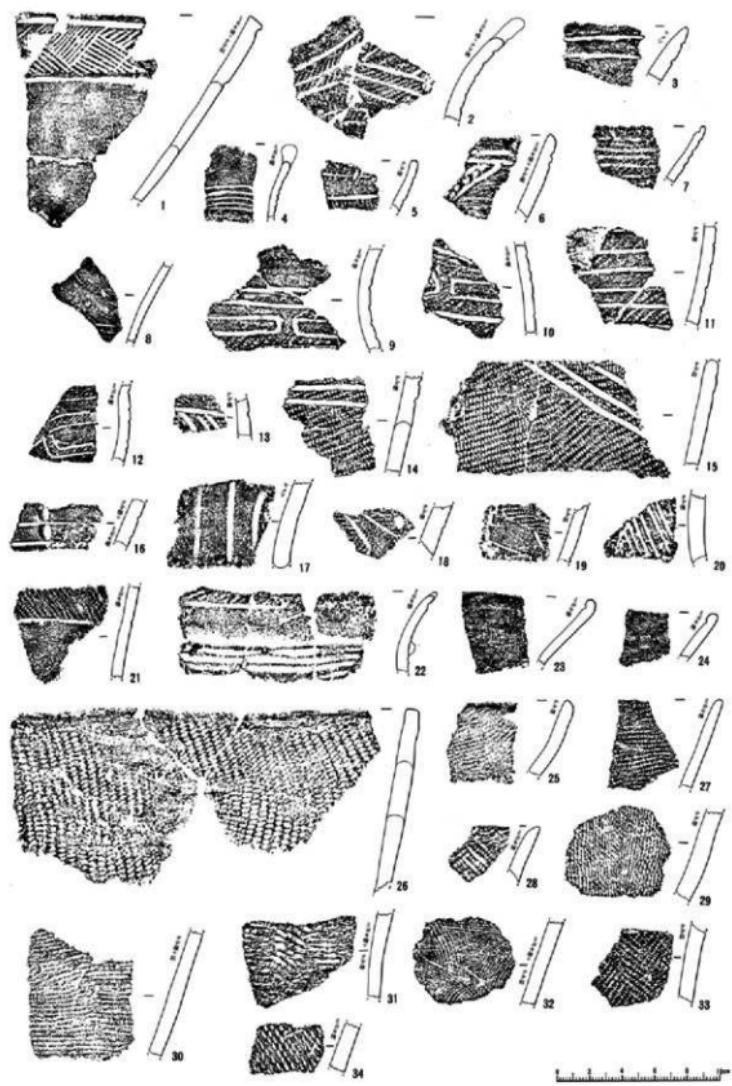
IV



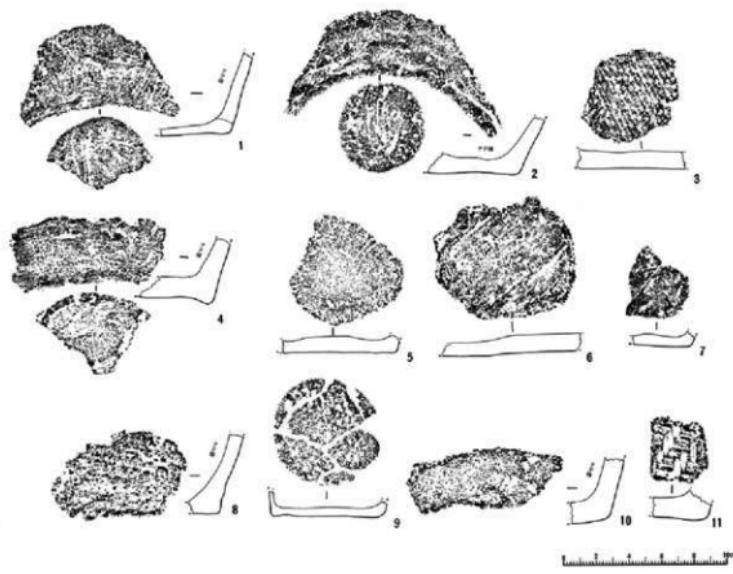
第107图八幅原No.5遗踪A区出土土器拓影图(1)



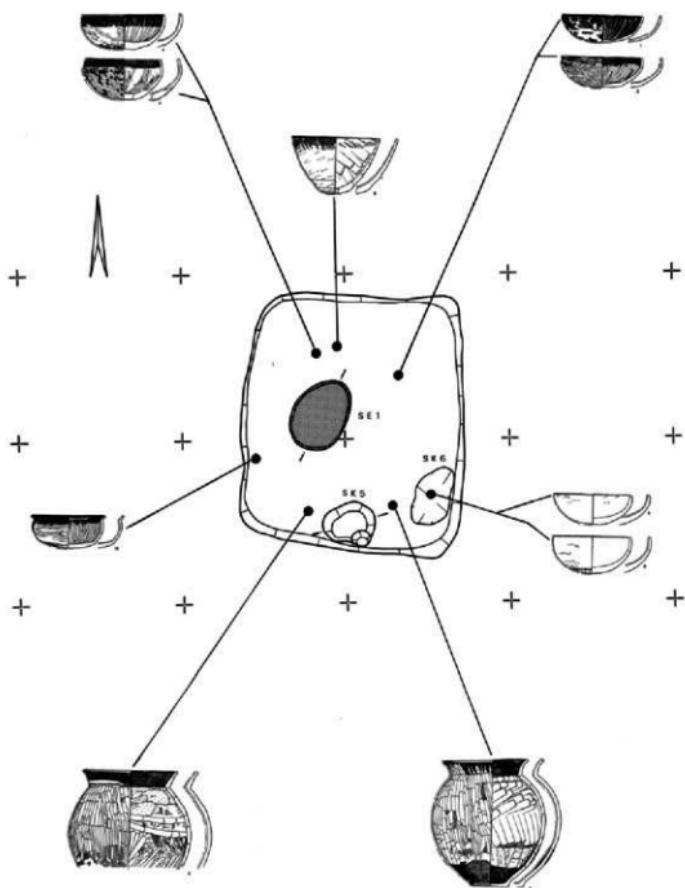
第108图八号原No.5遗址A区出土土器拓影图(2)



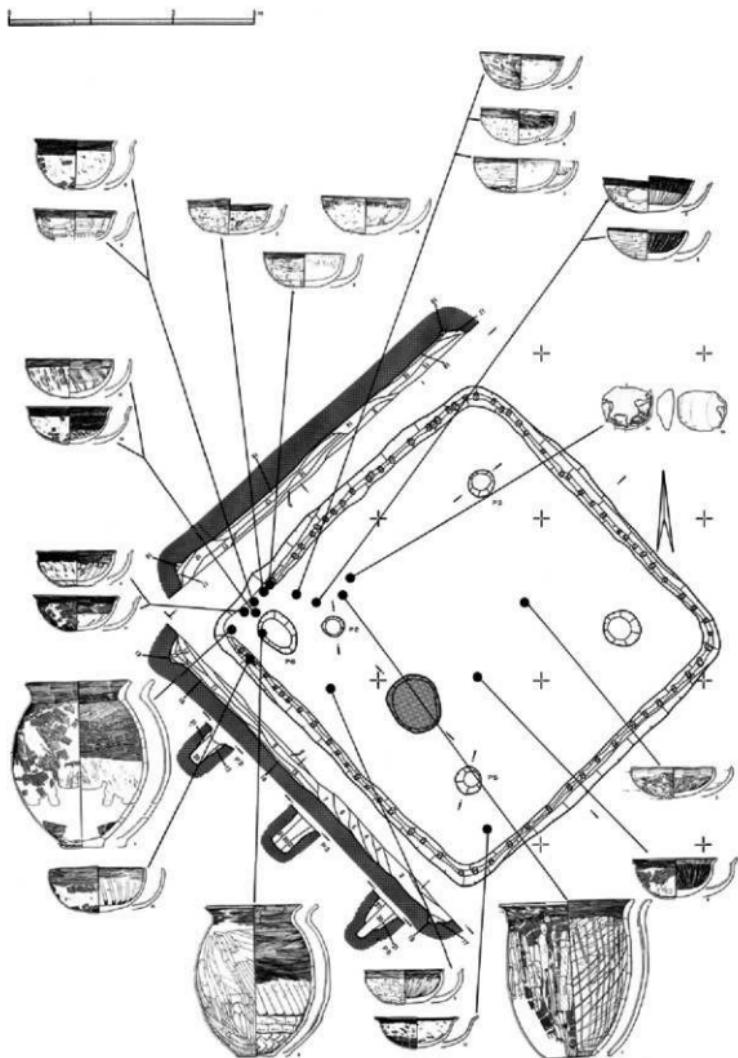
第108图 八幡原No.5遺跡A区出土土器拓影圖(3)



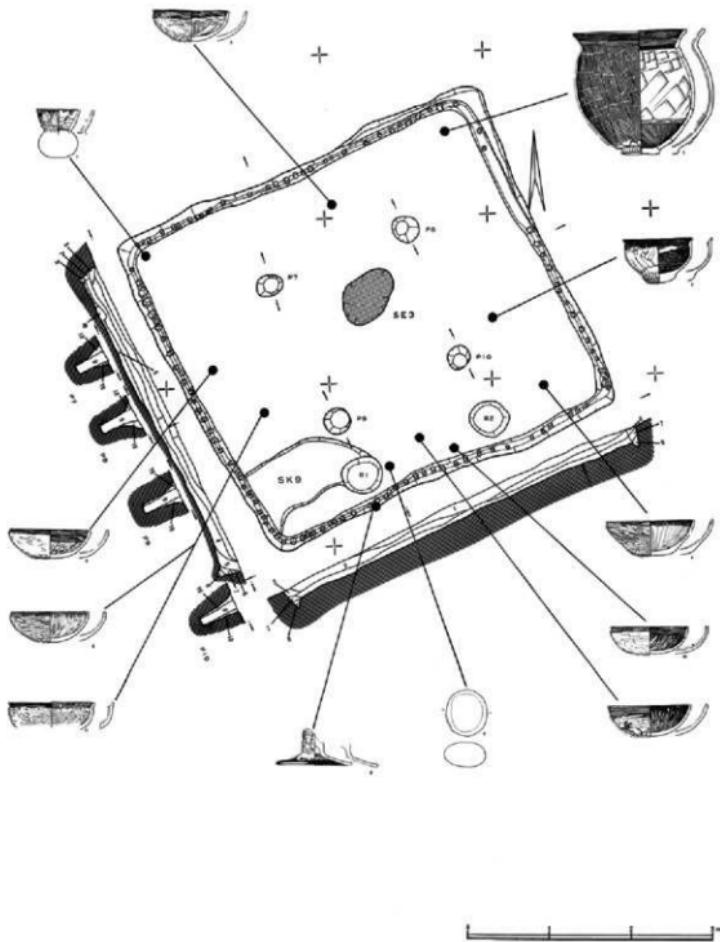
第110図八幡原No.5遺跡A区出土土器拓影図(4)



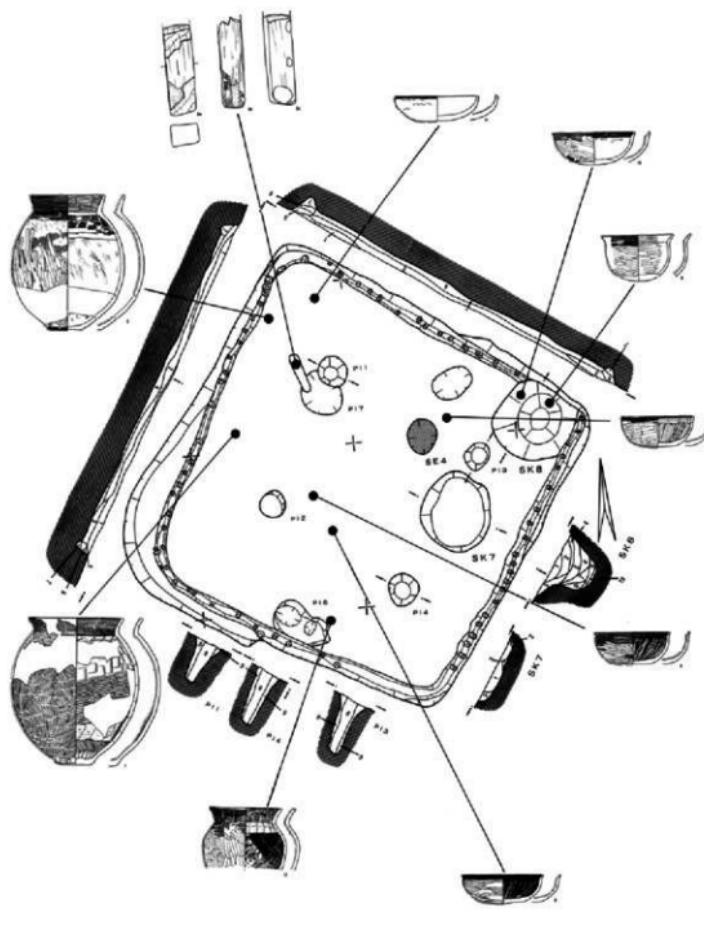
第112図八幡原No5遺跡B区S T 1平面図



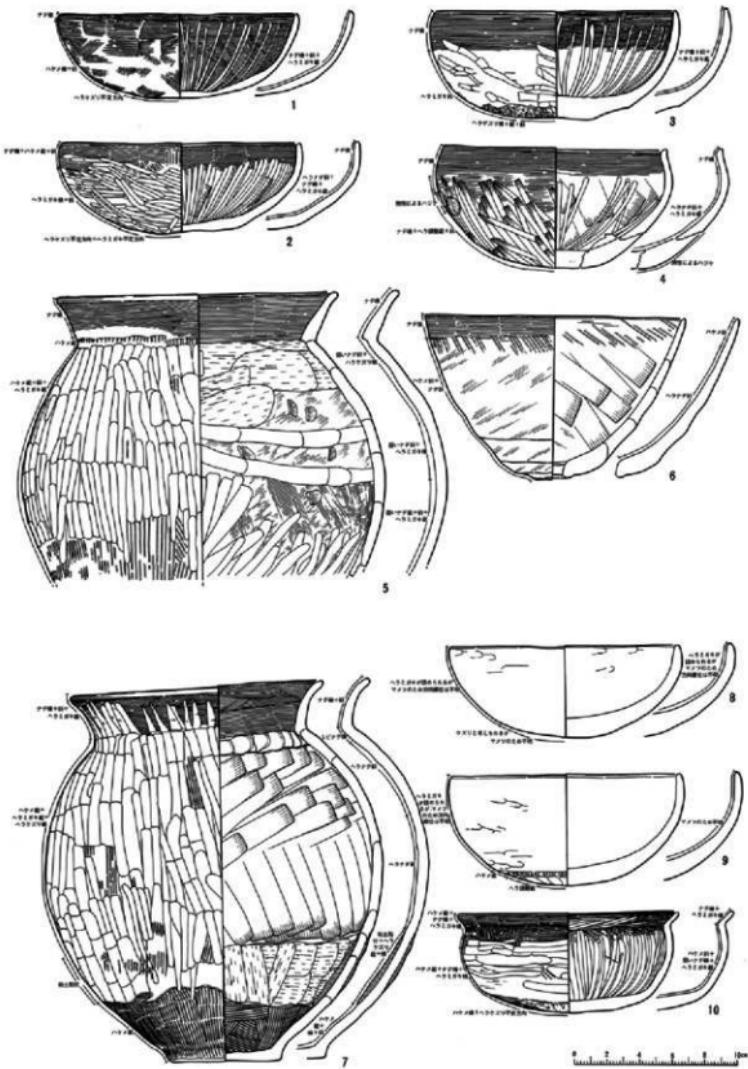
第113図 八幡原No.5遺跡B区ST 2平面図



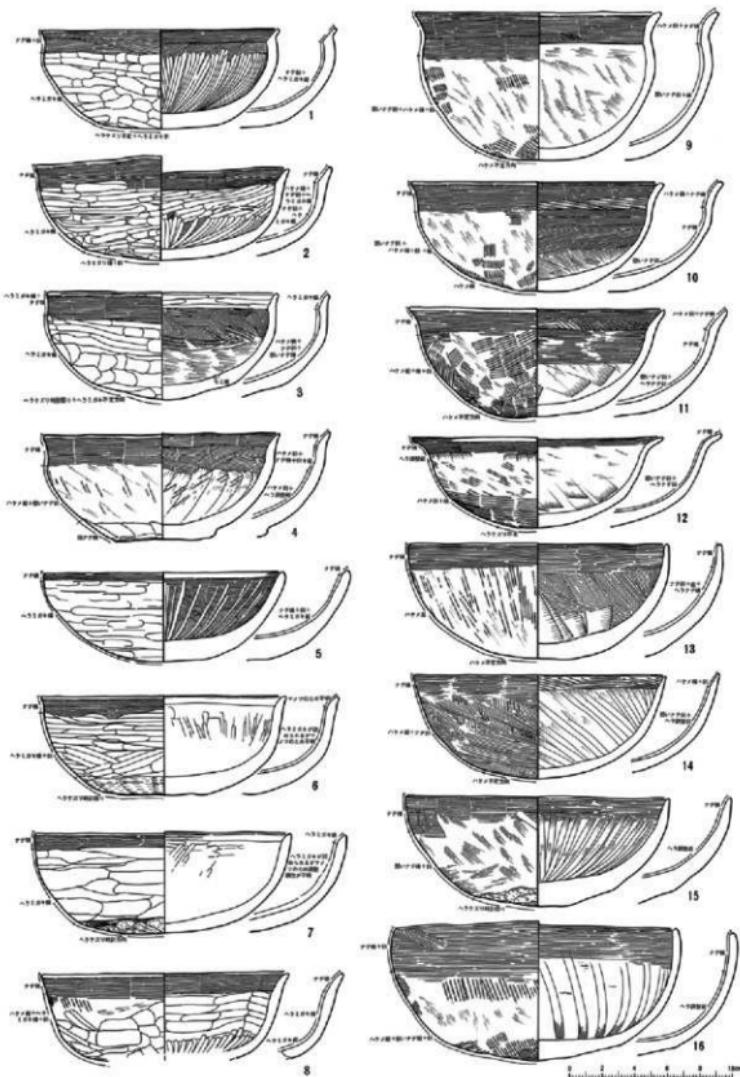
第114図八幡原No5遺跡B区ST3平面図



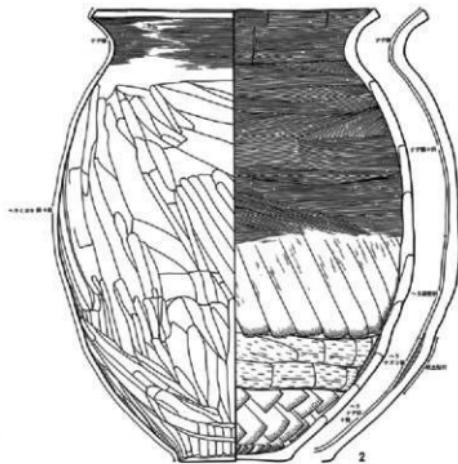
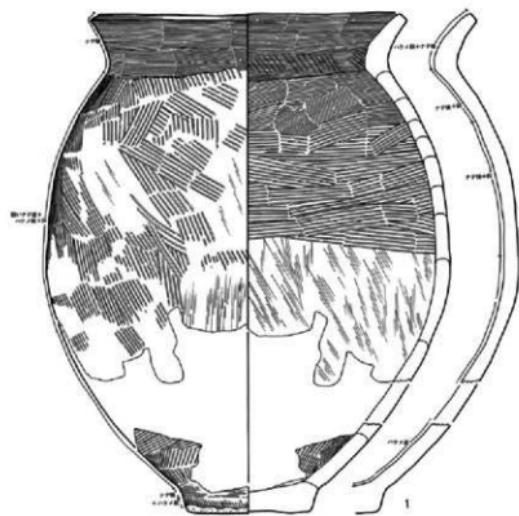
第115図八幡原No.5遺跡B区S T 4平面図



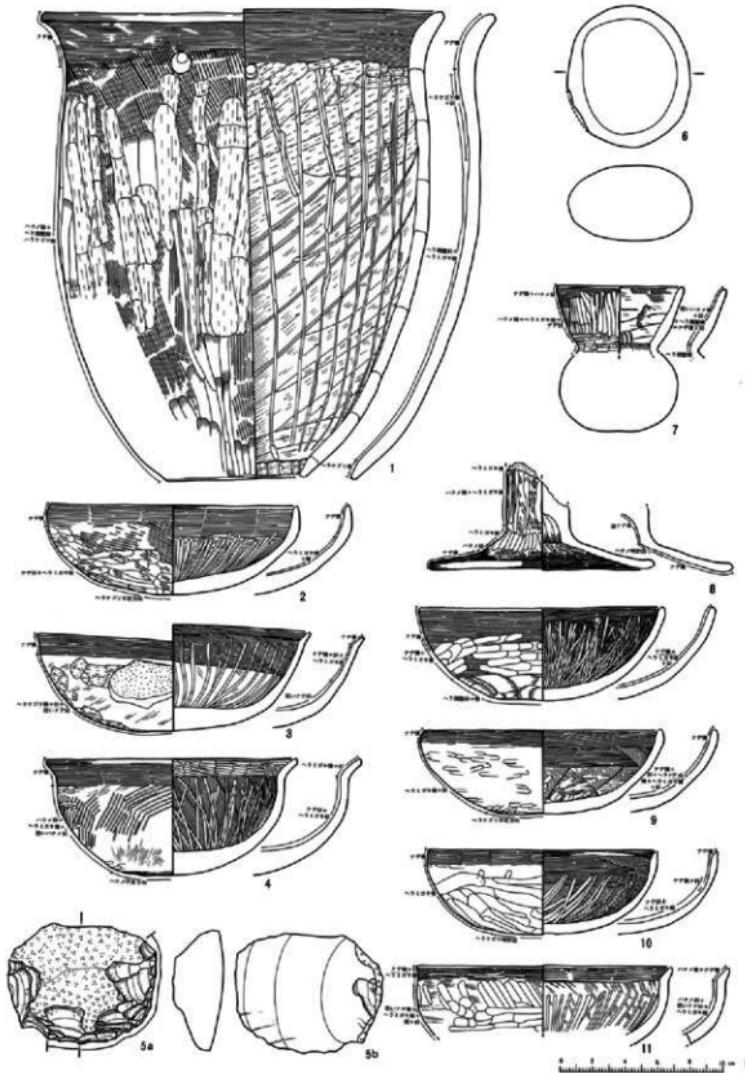
第116図 八幡原No.5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(1) S T 1



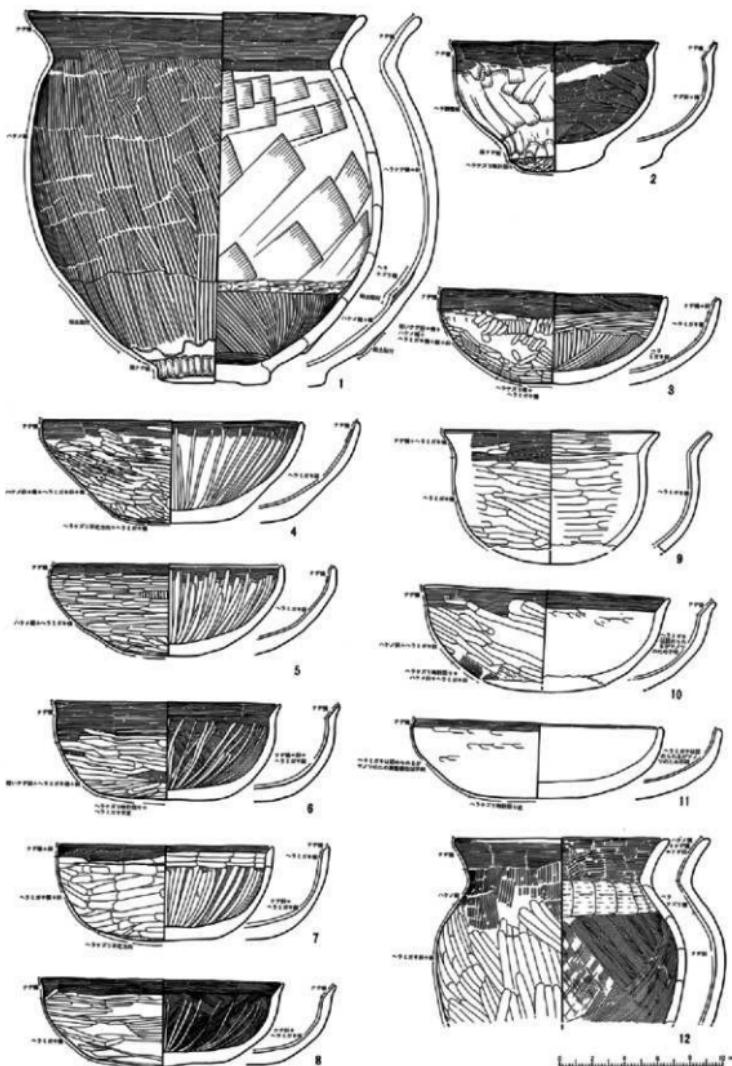
第II圖八幅原No5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(2) S T 2



第118図八幡原No.5遺跡B区住居跡内出土土器実測図(3) ST 2

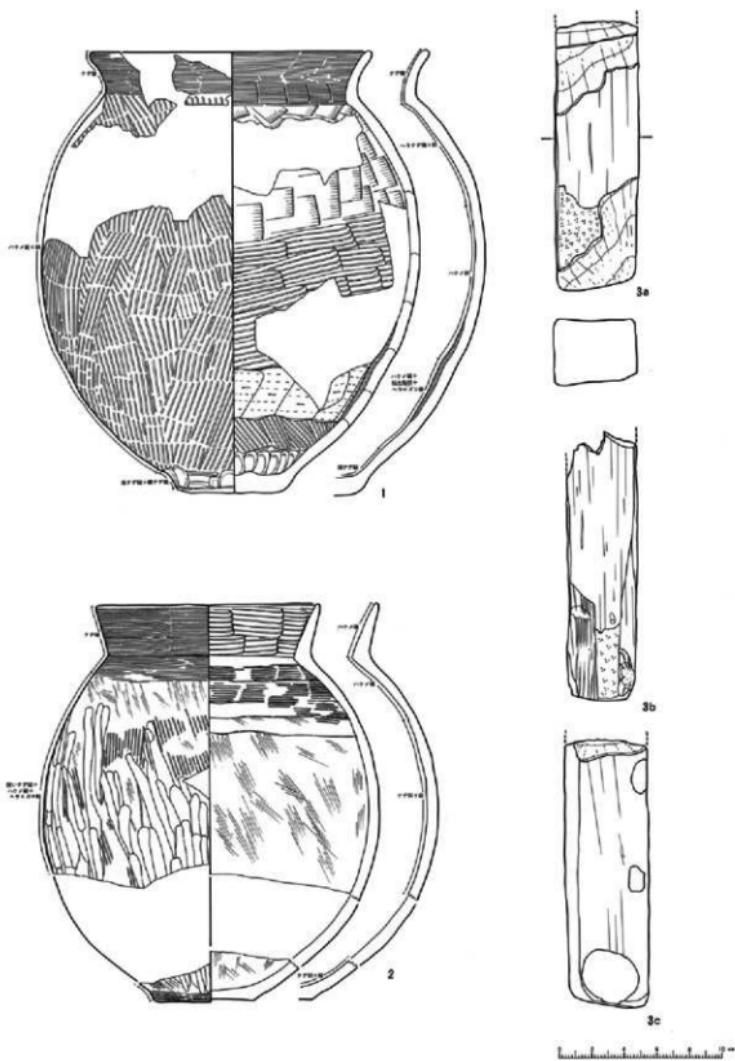


第119図八幡原No.5遺跡B区住居内出土土器、石器実測図(4)
S T 2 1~5
S T 3 6~11



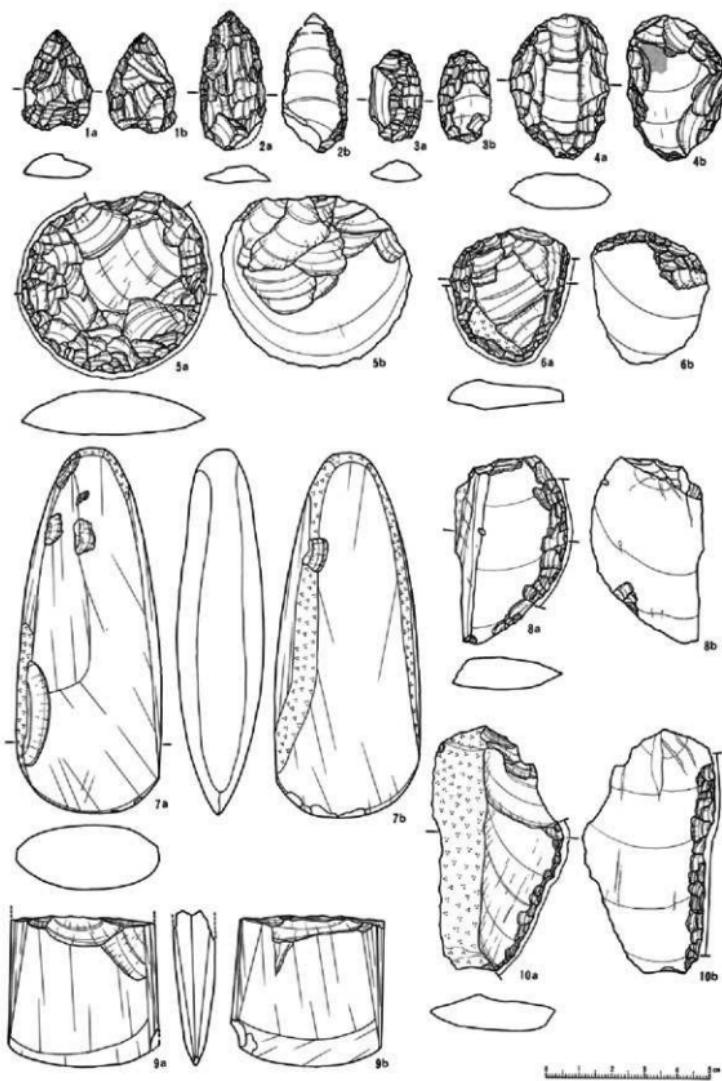
第120図 八幡原No.5遺跡B区住居内出土土器実測図(5)

ST 3 1~5
ST 4 6~11



第121図 八幡原No.5遺跡B区住居跡内出土土器、石器実測図(6)

S T 4



第12図 八幡原No.5遺跡B区B区出土石器実測図

第8章 八幡原No.9（八幡堂）遺跡

I 遺跡の概要

本遺跡は、米沢市万世町大字堂森字八幡堂295～305他に所在する。遺跡は桑山遺跡群の最西端の標高257m～259mを有す微高地に位置し、現状は水田と畠が主で一部原野となっている。

遺跡の発見は昭和45年に行なわれた開田工事の際に偶然発見された。その後、昭和48年の分布調査では本遺跡を縄文前期の良好な集落地で、開田工事により一部破壊されたとしている。

開田前の現状は草木が繁茂し湿地帯に囲まれた荒野であったが、以前はこの他に堂森、金谷八幡神社が祭られていたと言われる。今回の調査においても、数点の石塔破片や板碑が数点確認された。八幡堂の字名はその名残りであろう。

II 調査の経過

昭和55年に実施した、分布調査に基づいて調査範用を設定した。調査の開始は、重機による除雪作業から開始し、本格的な調査に着手したのは4月3日からであった。

今回の調査は広範囲に及ぶことから、遺跡中央を流れる小川を境にして北側の水田地帯をA区両側の微高地をB区とに大別して調査を進めることにした。

A区は開田の際に1部破壊となっていることから、遺構確認用トレンチをグリット266-221を基点として北方向に、80m×2mのトレンチを東西16m間隔で2本を配した。その結果A区においては比較的表土が浅く(15cm～20cm)、特に西側は開田工事の際に地山まで削られていることから遺構の確認はきわめて困難な状況であった。しかし東側を中心とする一帯は比較的残りが良好であり、本地区を調査範囲として設定した。

グリットは8mを基本とし、表土無遺物層であることから粗塙は重機を用い、作業を進めた結果、1号方形構壙墓、SD1が確認され、SD1からは多量の有機物を含む層が存在することからこれらの遺構を中心に精査を続けた。

一方残雪のため調査困難となっていたB区も4月21日から着手され、A区と平行して進めることにした。グリットはB区の性格から4mを基本とし、遺物包含層を有すことから粗塙りは人力で実施する。その結果、近世の墓壙、方形周溝墓、住居跡等が重複して存在していることが確認され、それらの遺構を中心に精査作業を進めた。

A区は6月20日、B区は6月28日に調査が終了し、現地説明会を7月3日に開催した。調査面積はA区4,000m²、計5,500m²、精査面積A区2,300m²、B区1,000m²、計3,300m²であった。

III 遺構

A区、B区合せて、52基の遺構が検出されている。前者の遺構は開田の際に大半が失なわれ、地山に残るわずかな小ピットや、深い堀り方をもつ、S D 1、1号方形周溝墓がある。

B区は方形周溝4棟を含む墓があり、ことに方形周溝墓中央からは東北で初の主体部をもつ2墓が含まれている。

a 方形周溝墓

A区1基、B区2基の計5基があり形態的に3グループに分類される。第1のグループは全周する周溝の端が中央で切れる（ブリッヂをもつ）グループで、3号方形周溝墓と5号方形周溝墓がある。

第2のグループは周溝の一部を大きく開くグループで、4号方形周溝墓がある。北側が破壊されていることから全体的な形状は推定しがたいが、おそらく「コ」状を有するものとみた。

最後のグループは周溝が全周するものであり、1号方形周溝がある。3号方形周溝墓に切られる2号方形周溝墓は南側が小川に切られていることから形状を把握することができないがB区の殆んどが南端にブリッヂを有することなどから同様の形状を有する可能性がある。

大きさは1号方形周溝が南北11.6m、東西11.8m、幅50cm～120cm、深さ20cm～45cm、2号方形周溝が、南北83m×東西（8.5m）、幅82cm～151cm、深さ10cm～38cm、3号方形周溝が南北6m×東西（7.2m）、幅70cm～122cm、深さ14cm～25cm、4号周溝が南北（5m）×（5m）、幅60cm～75cm、深さ19cm～23cm、5号周溝が約一辺（5m）、幅50cm～67cm、深さ11cm～19cm（）は推定となる。

主体部は2号・3号・5号から検出され、方形もしくは橢円形状を有し、2号が90cm×140cm深さ12cm、3号が62cm×121cm、深さ9cm、5号が92cm×（170cm）、深さ10cm計り内部より、手づくね土器3点と瓶の上部1点が認められた。

出土遺物は、1号周溝は北コーナー部から變形土器下半部1点、2号周溝南溝から底部の尖孔器1点、主体部から環状手づくね1点と高环状手づくね土器1点がみられ、3号周溝も變形土器1点が南溝ブリッヂ付近より1点、4号は主体部から瓶の口縁破片1点、同じく5号周溝も南溝ブリッヂ周辺から變形土器破片1点がみられ、全体的に遺物出土が少ないと言える。

b 土 壤

B区のみに21基ある。覆土すべての状況から後世に掘り込んだもので、S H 1～S H 3は江戸末から明治初期の墓壙と判った。不整の円形らしい橢円形を示めし大きさは50cm～250cm、深さ15cm～35cmと浅い。

c 溝状遺構

方形周溝を除くとA区に大形の河原状溝S D 1と新しいA・B区のS D 9、S D 10がある。A

区の大溝は、八幡原No.3に検出した遺跡で、No.4 No.5の中央を西に向っているものと同遺構と考えられる。不規則に蛇行を有し、No.3 遺跡で幅 m位 No.4で m位を保ちながらNo.9 遺跡で方向を北に変え最大幅48mの広さをもつ様になる。本遺跡からは1~6層の6枚に層位が分かれ、5層を中心に関物が検出されている。

d 橋状遺溝〔第124図~第125図〕

1号方形周溝墓から溝状にカーブを描く中央に2基(WR15・RW16)の杭状の丸太と横木の組み合せが検出している。両者とも径8cm位の丸太5本ないし、6本を直打し、間に架材による割木の横木を土台と設するのを特徴としSD1の溝外壁上にも柱穴状の小ビットP9~P18が存在することから同様の施設が配されていたものとみる。

IV 遺 物

1) 土器〔第132図、第133図、第142図、第144図〕

A区はSD1の大溝を中心に、B区は方形周溝墓を中心に検出された。ここでは両者をまとめ年代順に述べる。

I群土器〔第132図1~3〕

撚糸圧痕文及び羽状織文を有する土器でA区SD1最下層より3点認められている。縄文前期初頭に位置付けられる。

II群土器〔第132図4~29、第133図1~5、第142図1、第144図1~18〕

棒状工具による沈線文・山形文・半竹管による連続爪形文、平行沈線、粘土紐による貼付文、同ボタン状の貼付がある。器形は筒状の深鉢形と吹浦八幡原No.25にみられる口縁が外反し、胴部がふくらみ下胴部から底部にかけて直下する二者がある。いずれも口縁部が折り込まず、折り返し口縁も呈するものが多い。SD1のV層およびB区2号方形周溝墓付近から多く検出されたものであり、これらは大木6式に併行する。

III群土器〔第132図30~33、第144図19~30〕

すべてL型・R型の斜織文片である。A区のSD第4層とB区の5号方形周溝墓付近から検出されたものである。焼性は良くII群と比較して薄く、織文原体も細い。織文後・晩期に位置するものとみた。

IV群土器〔第133図6、第142図2~8〕

方形周溝から検出された土器であり、甕形土器3点、瓶器1点、壺形の底部穿孔土器1点、それに主体部の副葬品とみられる3点の手づくね土器3点がある。ほぼNo.5 B区と同時期の古墳前期に求められる。

V群土器〔第144図31〕

須恵器甕片1点でB区の第II層から検出したものである。

2) 木 器

A区のSD1最V層内から、点、同IIIより2点発見されいずれも1号方形周溝からSD1が北東にカーブする部分に集中し木器と他多量の自然流木とともに種子類が検出されている。ここでは木器と種子の二者に分けて簡単に説明を加えたい。

a 杵 〔第127図～131図〕

あるすべての杵が頭部打撃面が腐蝕しているものの原形に近いものと考えられる。先端部に削り面を有し、尖状に整形した面を持つ。細部については下記の表を参照願いたい。

第12表八幡原No.9 A区出土 RW15, RW16計測表

図版番号	RWNo.	材質	長さcm	太さcm	図版番号	RWNo.	材質	長さcm	太さcm	図版番号	RWNo.	材質	長さcm	太さcm
第127図3	RW15	赤松	108	8	第129図10	RW15	赤松	97	7	第129図5	RW16	コクシギナラ	34	5
〃4	RW15	檜	70.85	4	〃11	RW15	赤松	81	7	第129図8	RW16	赤松	100	7
〃6	RW15	コクシギナラ	86	5.5	第129図1	KW15	赤松	103	8	第129図9	RW16	赤松	85	7

b 割木合 〔第127図2, 第129図7〕

原本を数回縦割して四角形の整形を呈す。片面部が腐蝕して、先端部が細身を有し、原形を角材に求められる。RW15が栗材で、長さ113cm, 幅19cm, RW16は同様に栗材で長さ80cm, 幅22cmを呈す。

○削り面の実験について

今回検出した、RW15, 16の削り面に対しては、金属性の刃物による加工面との指摘から、この問題を解決するため、磨製石斧の模造品を製作し、同質材を用いて実験を行った結果、磨製石斧でも十分にRW15, 16の削面を作り出すことが判明した。

c 火鑄臼 〔第135図2〕

発火道具の一種で、檜材を有し現長で13cm, 幅5.2cm, 厚さ0.9cmを呈す長方形である。「U」字形の凹が2ヵ所あり、6面はボル状になっていることから使用面と理解したい。

d 曲げ物 〔第135図1〕

杉材を有し、現長13.6cm, 厚さ0.8cmを呈す。平円形の板と、長方形の板を2枚組み合せたもので、両面に漆を施す。原形は円形を有する曲げ物の底部に当たる部分である。

e 訪錐車と紡錘車軸棒 〔第135図3〕

両者が接合された状態で検出した。紡錘車軸棒は、檜材を有し、先端部が若干欠損しているがほぼ原形である。現長で長さ16.5cm、中央部で最大巾の0.9を呈し、やや弓形をなす。

整形は全面に施され、両端は中央部を境して、先端部に向けて削り出し尖状に作りだしている紡錘車は、粘板岩性の小礫を表裏面から研磨を加えた後、側線にも方向を変えながら研磨を施し

円板状を呈し中央に穿孔をもつ。

f 出土植物遺体

A区 S D 1 のIII層、V層から次の種子が得られた。コブシ、漆、栗、ドングリ、トチ、杉の実等が検出し、特に漆は大型のシャーレ 2 個分に達した。

3)石器〔第145図1~14、第146図1~7、第147図1~3〕

本遺跡からは A区の S D 1、B区の包含層の両地区から153点の石器が検出した。その中で図面を必要とする24点について実測図を作成し、No.5 の第3表を適用して分類した。

石材は、145図4の黒曜石をのぞきすべて頁岩を用いている。素材には縦形剥片が多く使用されている。各群別の出土数は、I群石器6点、II群石器2点、III群石器1点、IV群石器3点、VI群石器3点、VII群石器11点、XIII群2点となり、V群石器、VII群石器、IX群石器、X I群石器、X II群石器の5形態を出土していない。

石器の年代は、No.5 A区のIV層出土土器X群a類と併行するのが大半で縄文前期初頭に位づけられる。IV群石器の145図12、13は、IV群c類に属しその代表といえる。以下各群石器について簡単に説明を加えたい。

I群石器〔石鎌〕〔第145図1~6〕

A区のS D 1 出土は、145図の1点だけで、他はB区の包含層による。I群c類(5・6) I群e類(1~4)に分類でも、基部から湾曲を呈する形態が主体をなす。

II群石器〔尖頭器〕〔第145図7・8〕

B区包含層より、2点出土している。7はII群a類に分類でき、両面調整で整形し部厚い断面を有す。8はII群b類で火熱によるハジケ面を有す。

III群石器〔石錐〕〔第145図9〕

A区のS D 1 より1点検出した。縦長の小剥片を素材として、両面の光端部を中心に調整を加え整形した石錐である。尖状部がやや内容を素材として、両面に一次剥離を残す。

IV群石器〔石匙〕〔第145図10~13〕

A区のS D 1 を中心に4点出土し、IV群c類2点12・13、IV群b類11、IV群e類10点の3形態がある。Bは剥離面の観察より、先端部に再調整を施し作業線辺を整形した痕跡を呈す。

VI群石器〔石籠〕〔第145図14、第146図1・2〕

B区の包含層より3点出土した。VI群d類146図2、VI群j類145図1、146図2となる。本群石器もNo.5 A区IV層下出土の縄文前期初頭の特徴が認められ、IV群石器と一致する。

VII群石器〔スクレーパー類〕〔第146図3~7、第147図1~4〕

146図7はA区 S D 1 出土で、他はB区包含層出土である。VII群b類、146図4~6、147図1、3の5点がある。VIIc類、146図3、VIIe類146図7、VIf類147図2の4形態を存す。

XIII群石器〔石製品〕〔第147図4・5〕

B区包含層より出土した4は、砂岩性の楕円形を有する礫を素材にして表裏面と側面の1部に研磨を加え整形している。両面に未完通の孔を有す。5は粘板岩性の礫片、片面に研磨を施し凸レンズ状に整形し6本の刻線を有す。b面には敲打による調整痕を残す。A区S D 1より出土。

礫器〔第147図6～11〕

XV群11、XVI群6～8、10、XVII群9の計6点を数える。A区のS D 1からは、7、8、9、10、B区の包含層からは、6、11を検出した。石材は10の砂岩以外は、安山岩を使用している。

9、10は、本来セットで使用された礫器である。10は中央部に6cm×4.8cmの楕円形を有するボル状の凹部を呈し、深さは中央部で1.5cm計り、凹部内面に回転作業による使用痕を持つ。

Vまとめ

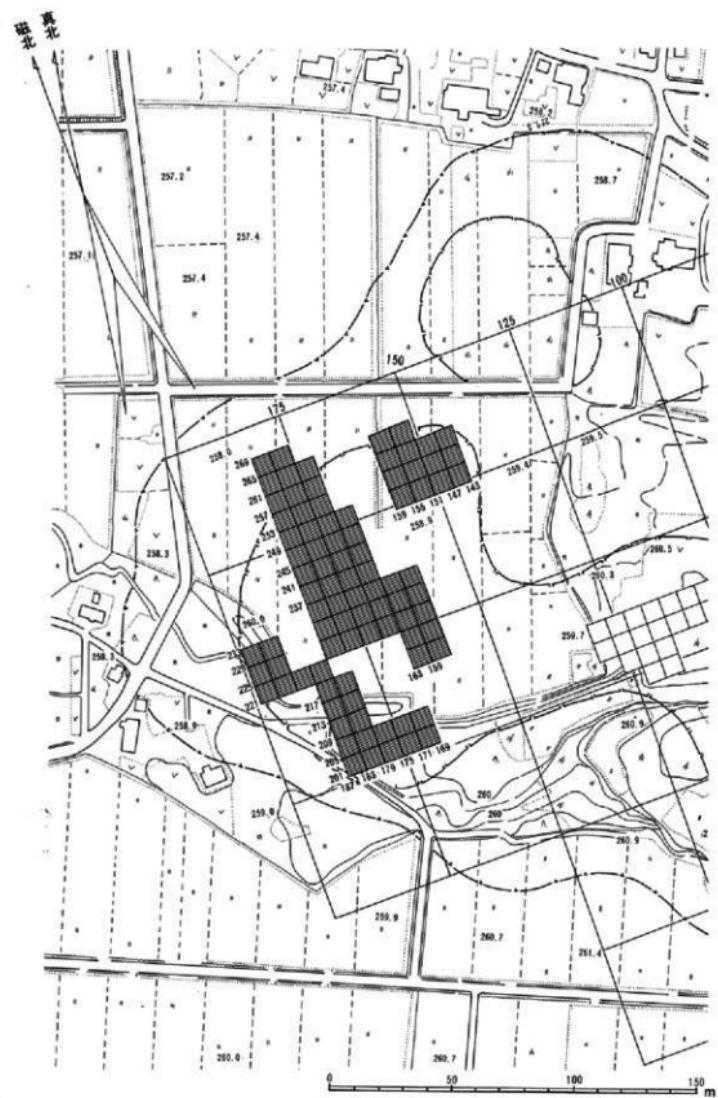
今回検出された遺構・遺物は既に述べている様に土地改良工事によって破壊され、前年度（昭和55年）より数少ないが、質的に重要な成果が得られたことは本来の遺跡の重要性を十分評価出来るものと云える。

その中の代表的な成果を上げまとめてると、一にS D 1〔河原状溝跡〕は前年度調査結果と昭和49年～51年にかけての八幡原遺跡群発掘調査の成果も加え、少なくとも本溝状溝が遺跡分布において重要な役割を果していたかが予想されよう。地形・標高差・地層から現在北東1.5kmを西下する旧梓川の河川と推測するのが妥当と云える。

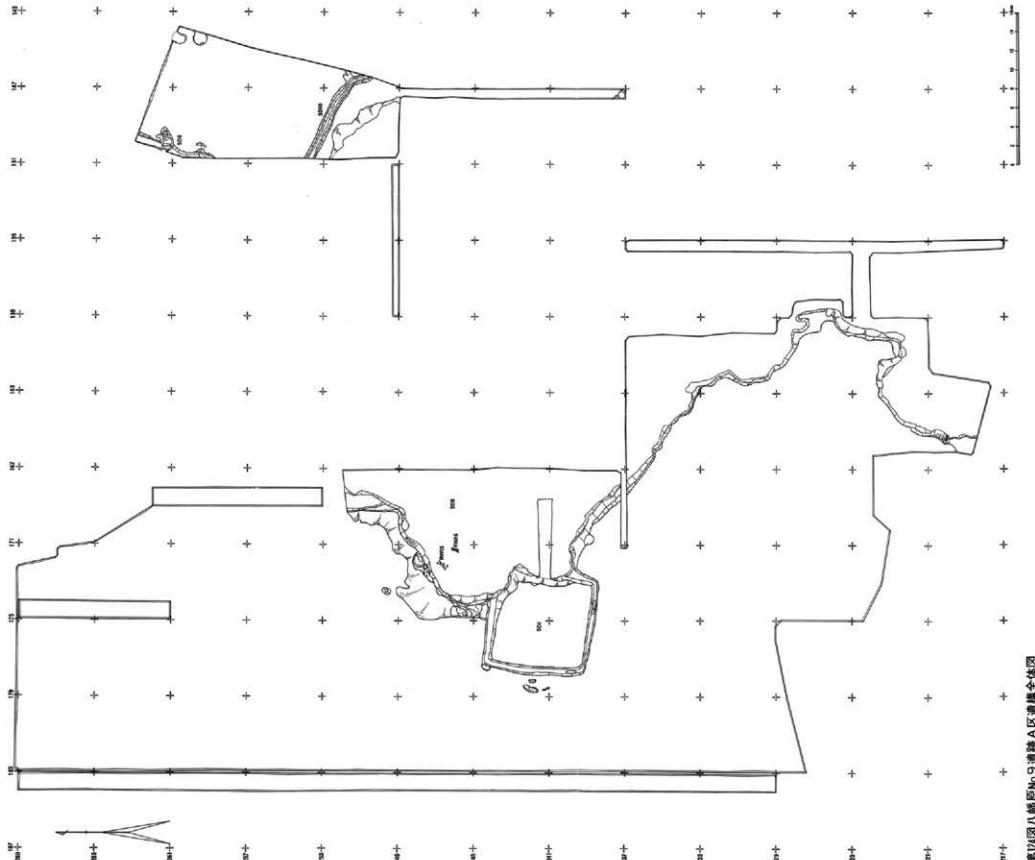
また溝状内に推積する層序と遺物の年代も、八幡原No25遺跡で得た同様な溝内IV層、V層の土質、遺物の年代が一致することも上記の関連性とともに注目したい。

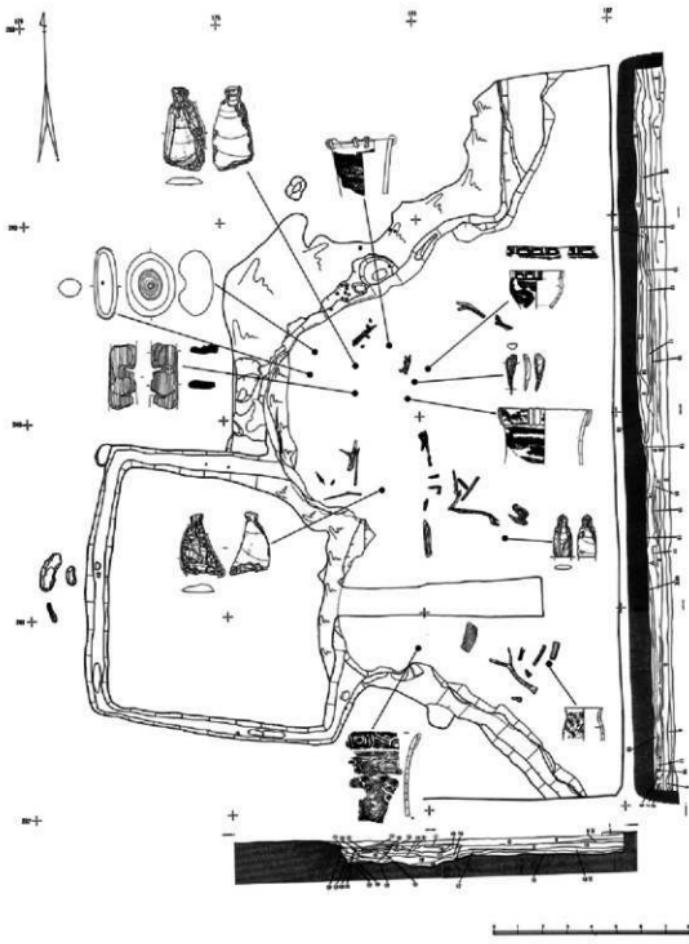
次の遺構としては方形周溝墓の発見があり、A区1期、B区4基の計5基が検出し、前年度に調査を実施したNo5遺跡、同No4、No3遺跡からはほぼ同時期とみられる竪穴住居10棟が検出していることや昭和53年に行なわれた八幡原No43〔比丘尼平〕遺跡からも方形周溝墓3基と竪穴住居跡1棟も発見されており、両者のつながりも問題になろうし、またB区においては東北地方では初の方形周溝墓の主体部とみられる土壙の発見があって、今後の調査、研究に貴重な資料をえたと言ってよい。

一方遺物の面では木器類が注目され、石製紡錘車と木製の軸棒が合体した例はなく、同じく火鏡白の発見も縄文前期の所産としては全国的に少なく、V層下面より検出されたRW15、WR16も縄文前期末の小規模な橋状遺構とみられる貴重な発見であった。

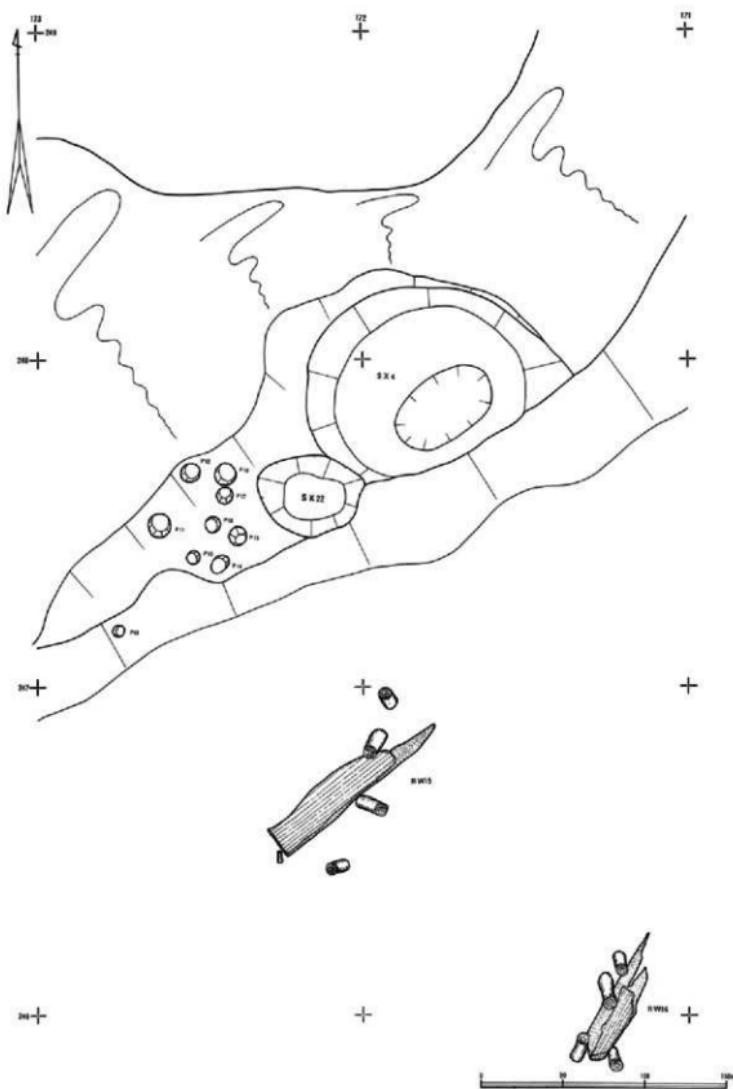


第123図 八幡原No.9遺跡グリッド配図

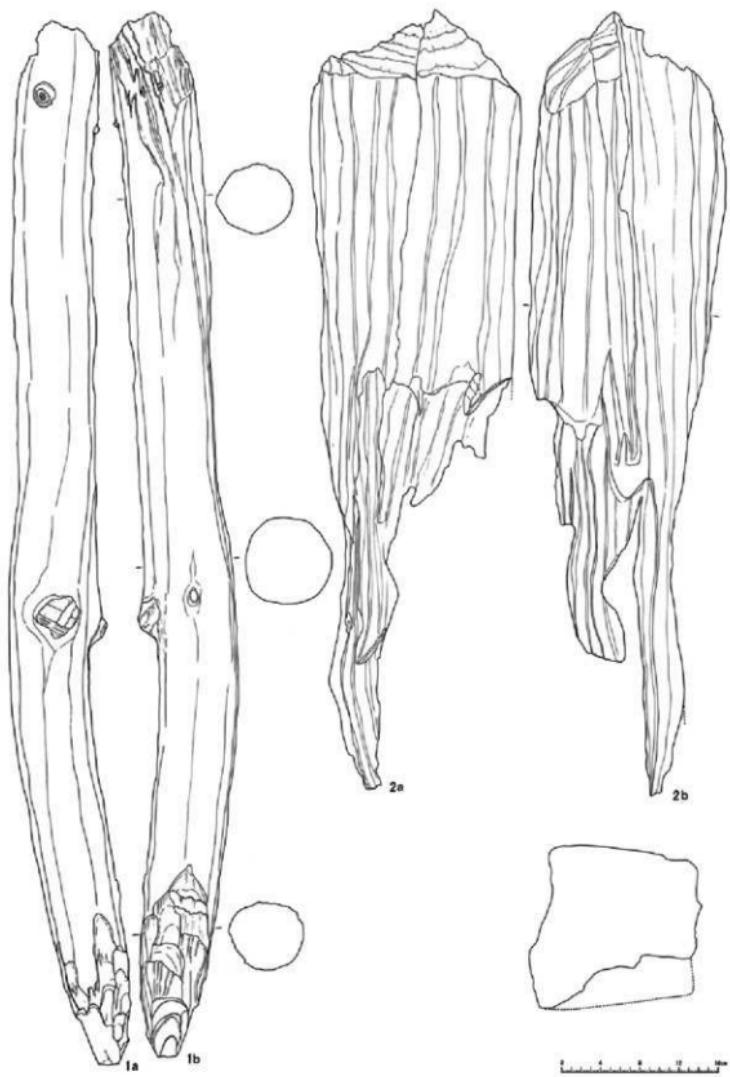




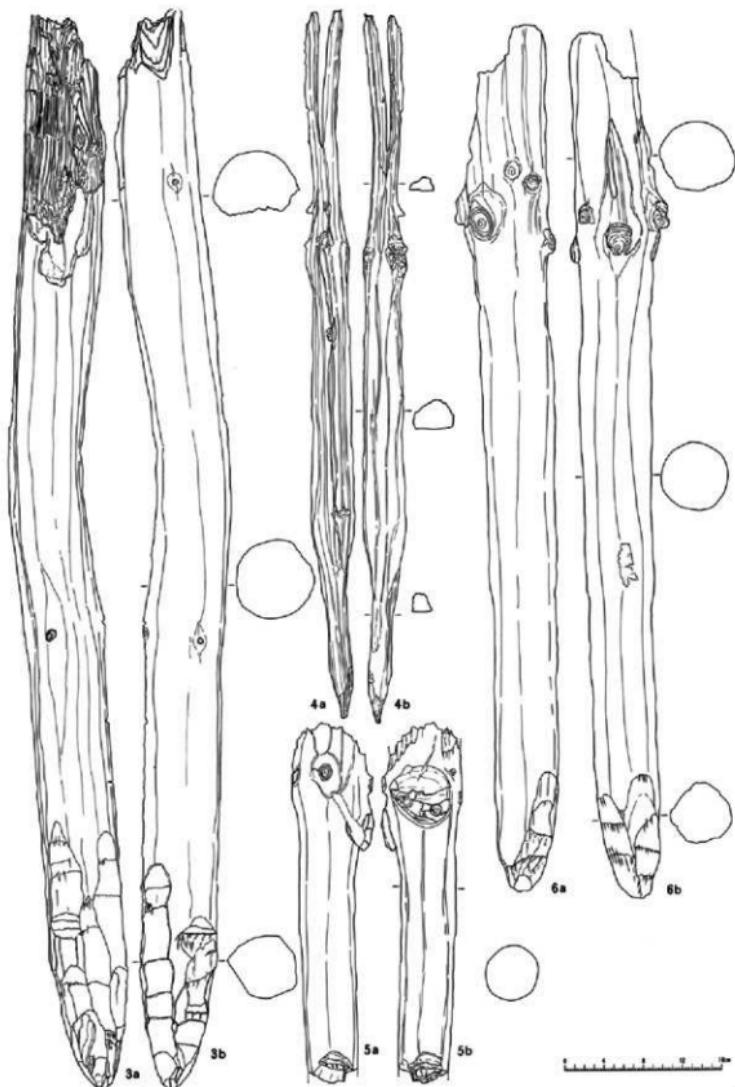
第125図 八幡原No.9遺跡A区SD1主要造構平面図



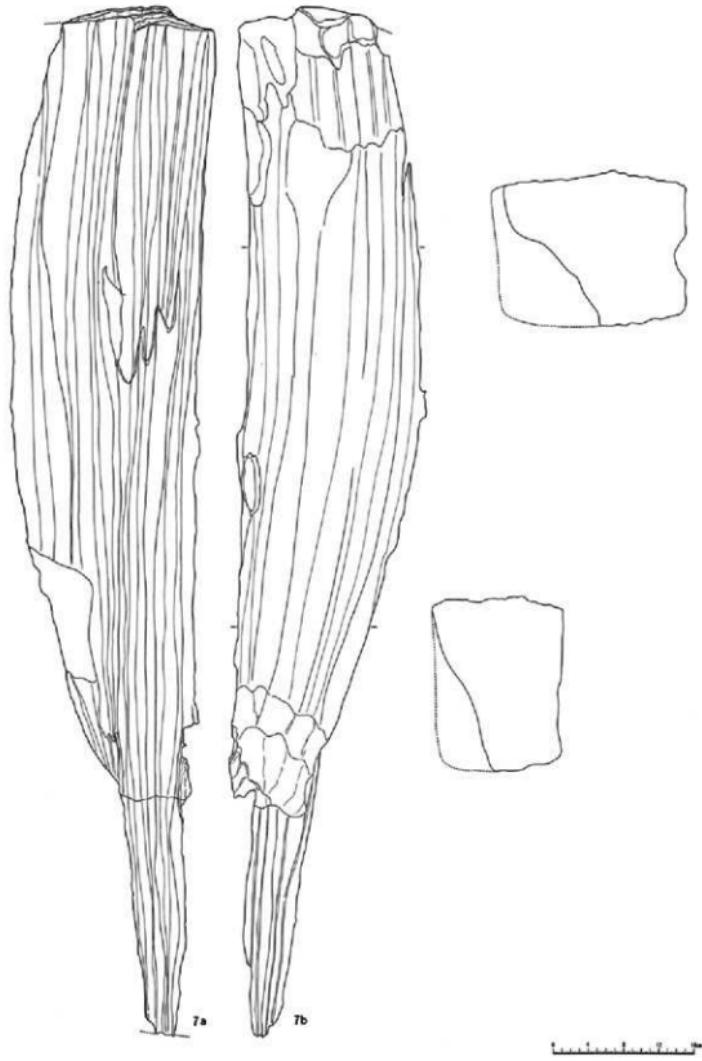
第118圖八幡原No.9遺跡A區樁狀造構平面圖



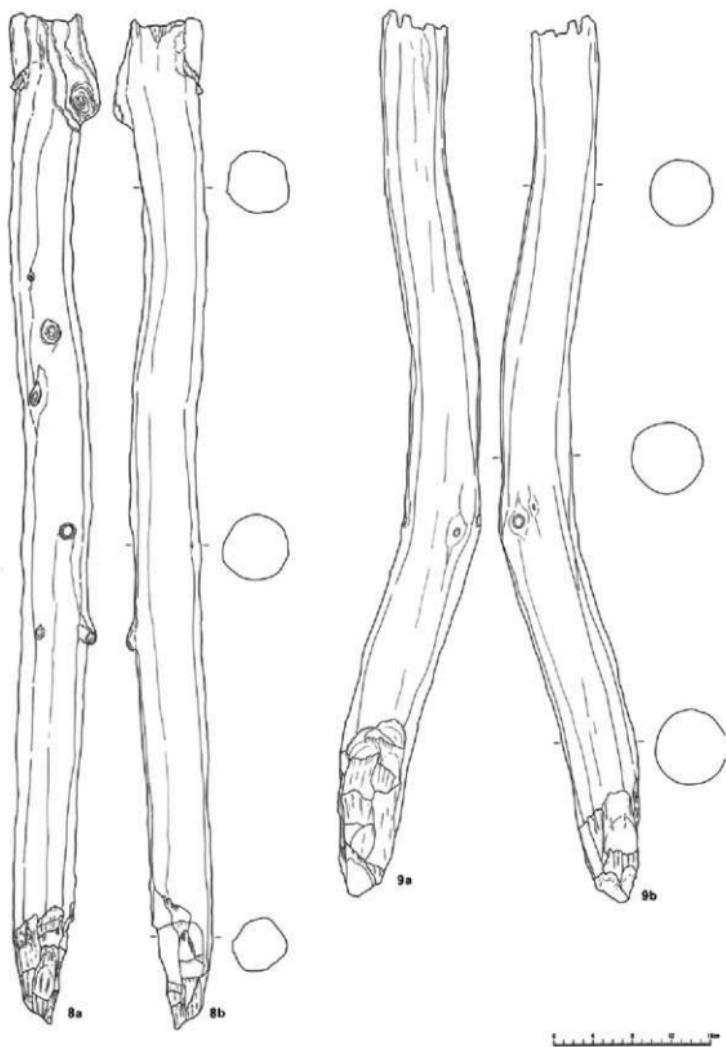
第127図 八幡原No.9 遺跡A区土木器実測図(1)



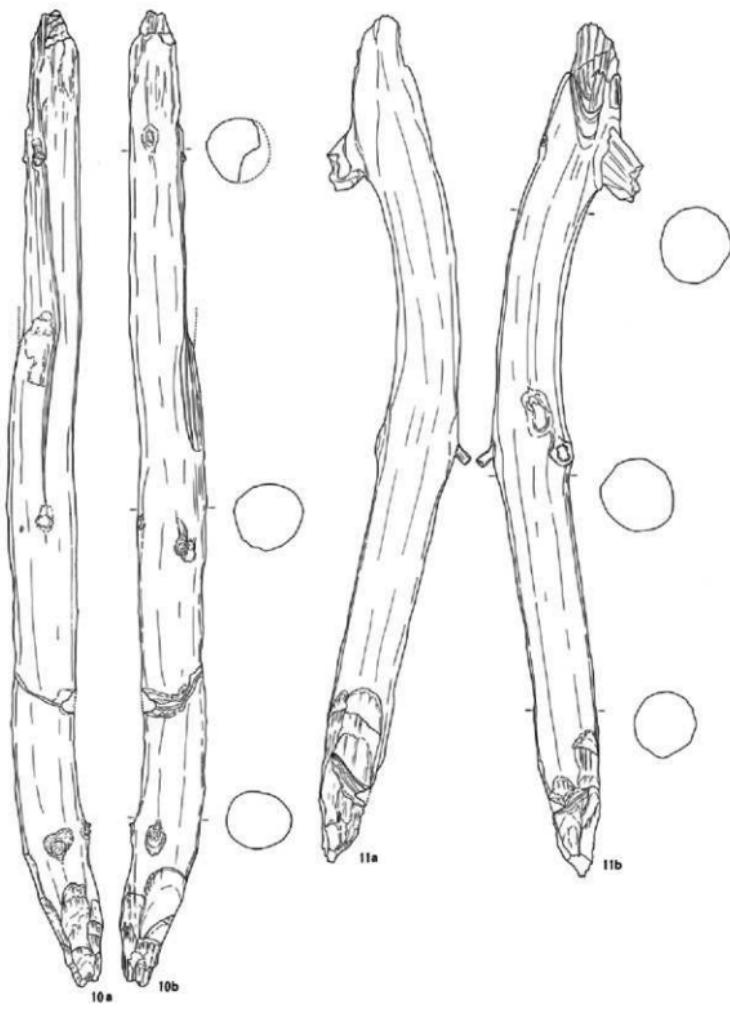
第124図 八幡原No.9遺跡A区土木器実測図(2)



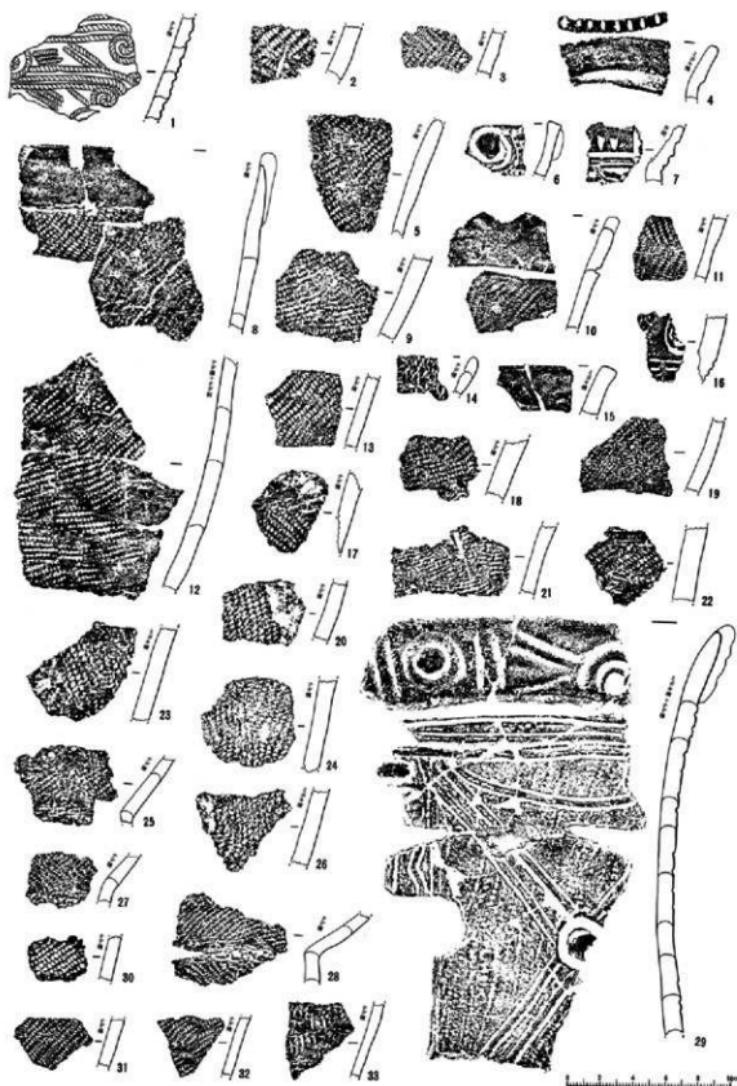
第12図 八幡原No9 遺跡 A区土木器実測図(3)



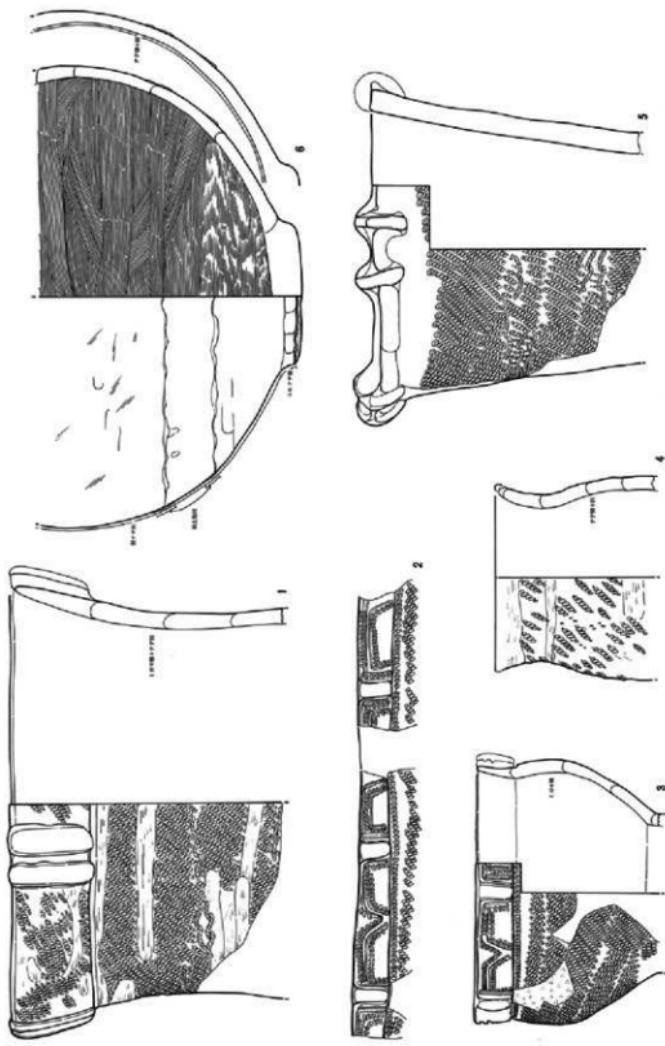
第130図 八幡原No.9 遺跡A区土木器実測図(4)



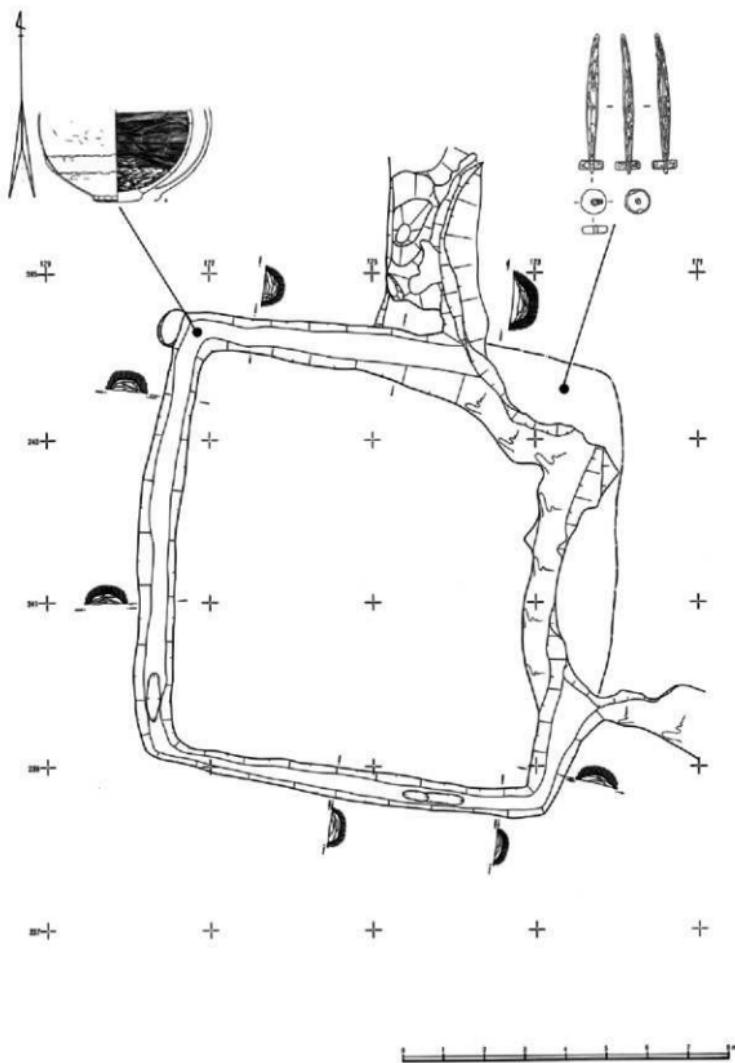
第III図 八幡原No9 遺跡A区土木器実測図(5)



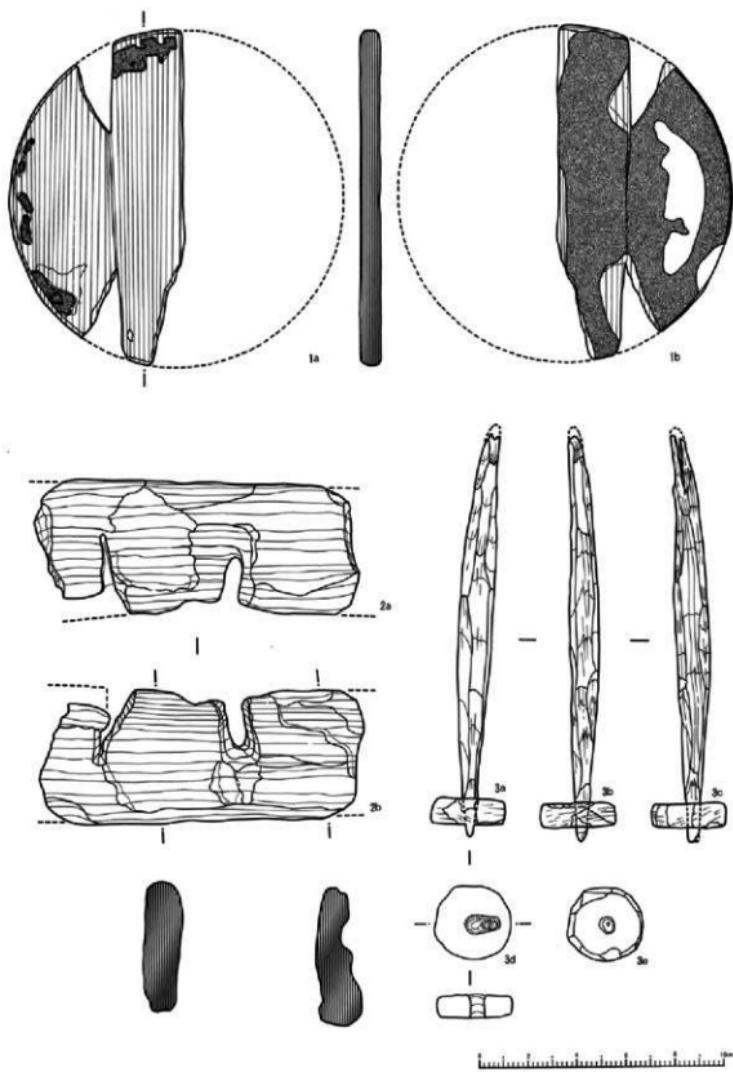
第132図 八幡原No.9 遗跡A区出土土器拓影図



第133図 八幡原No 9 遺跡 A区出土土器実測図

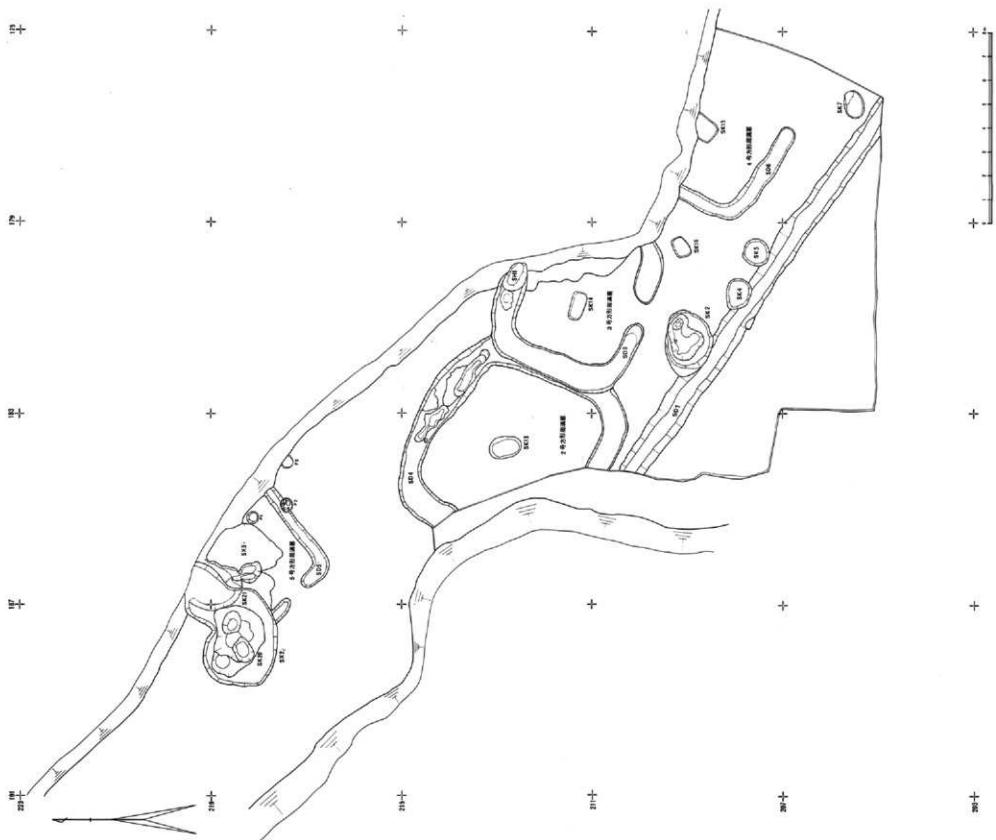


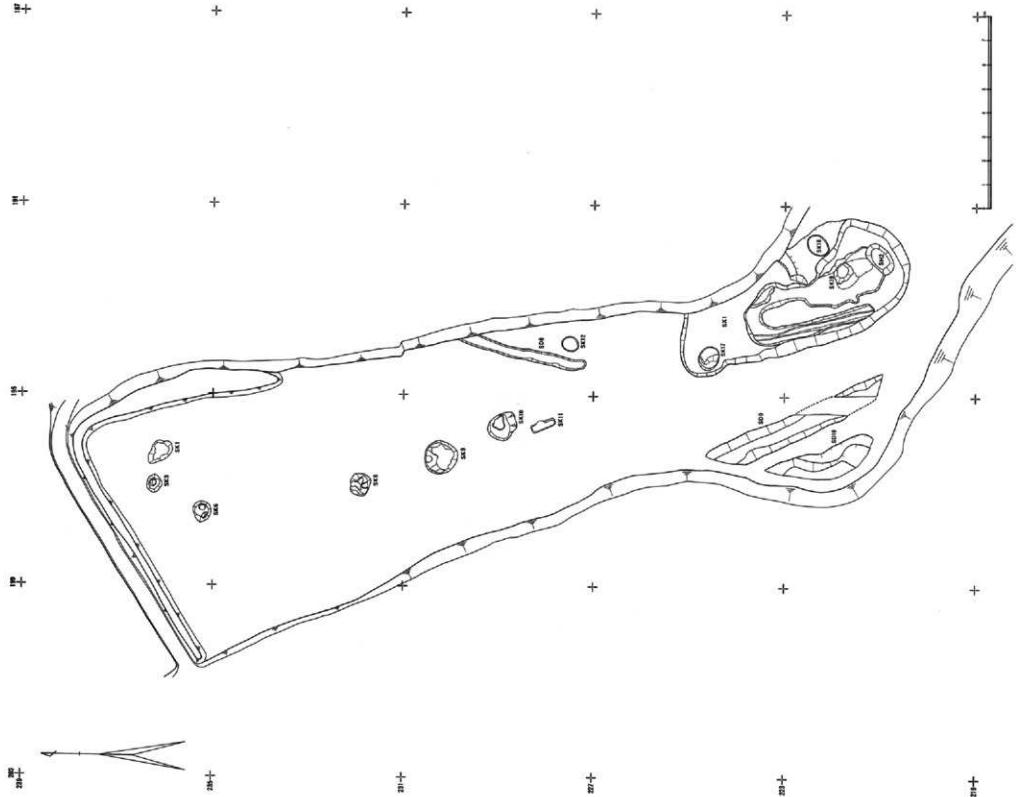
第134図 八幡原No.9遺跡A区1号方形周溝墓平面図

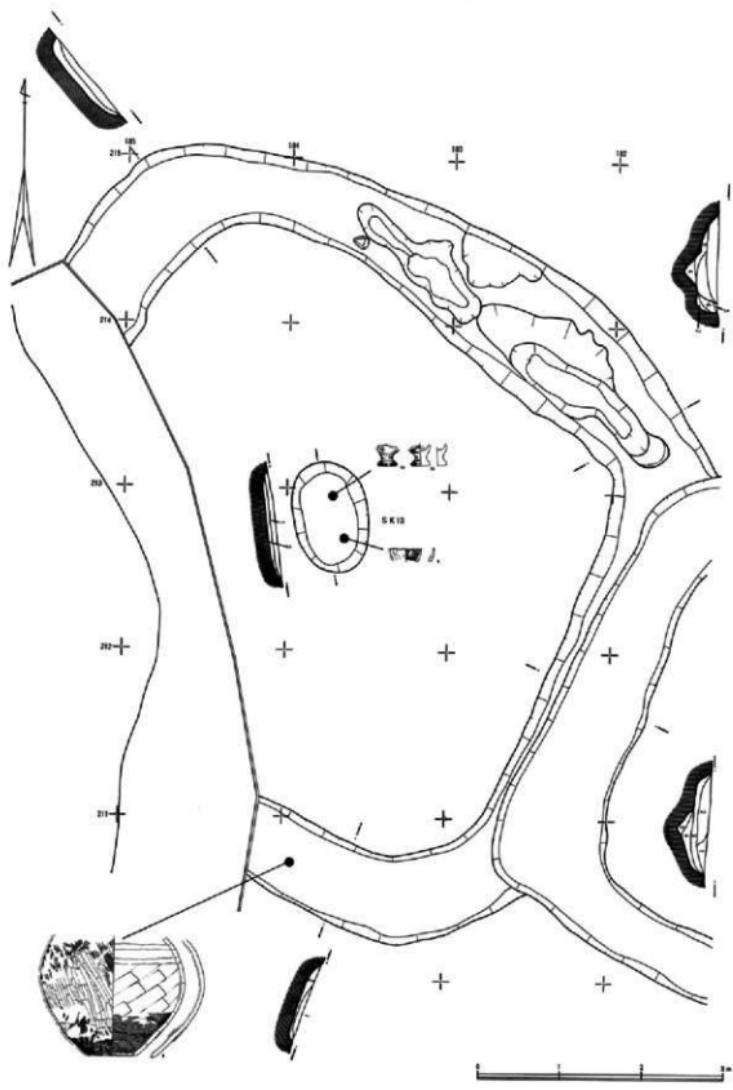


第115図 八幡原No.9遺跡A区出土木器実測図

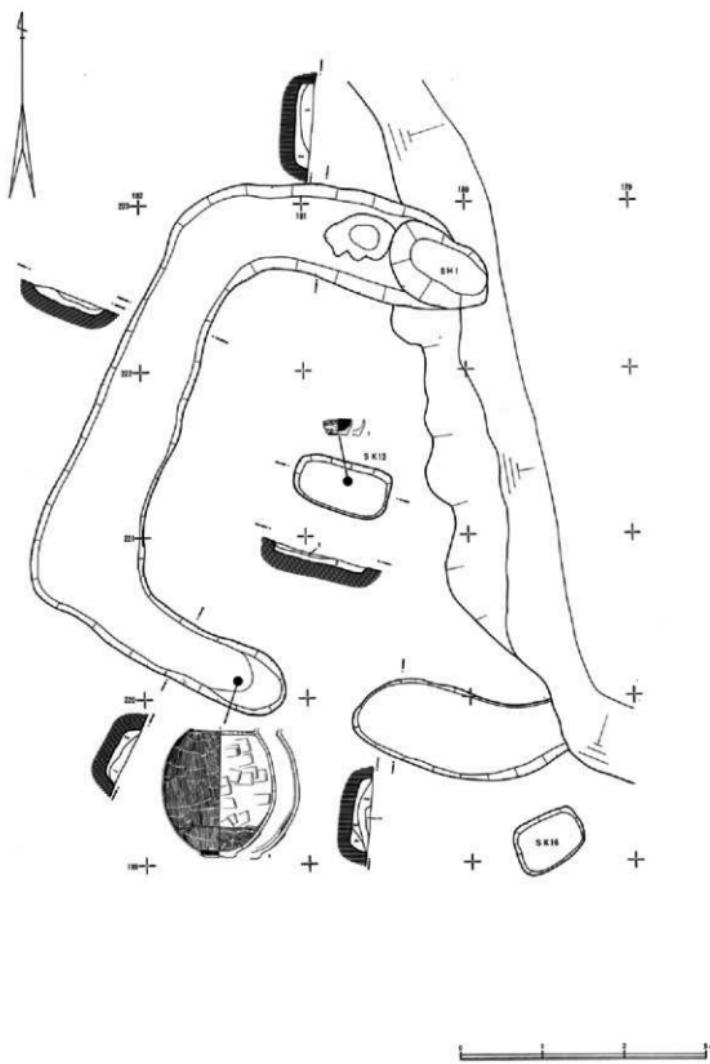
第15图八幅斯No.9道路区道路全休图(1)



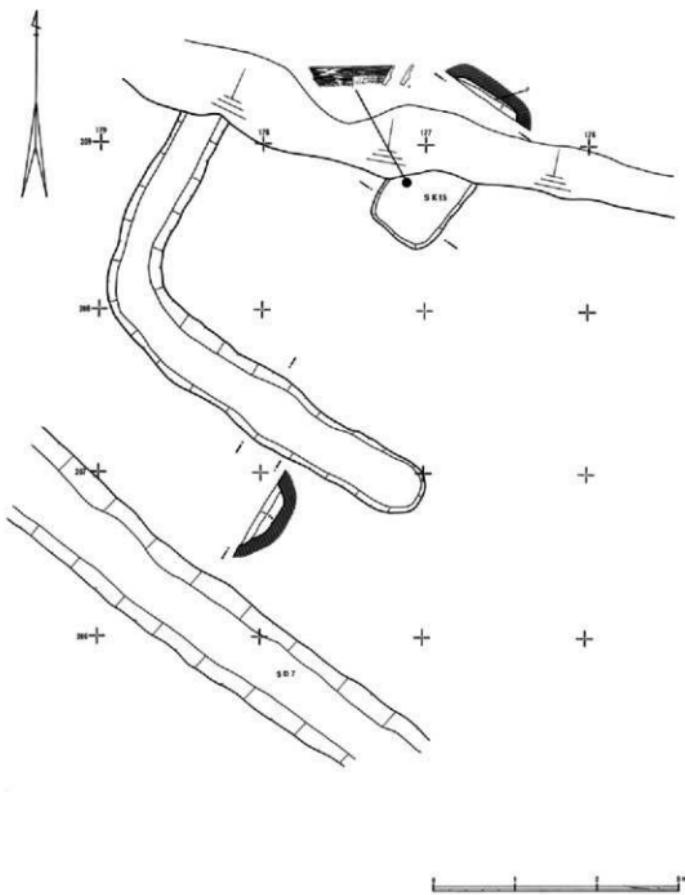




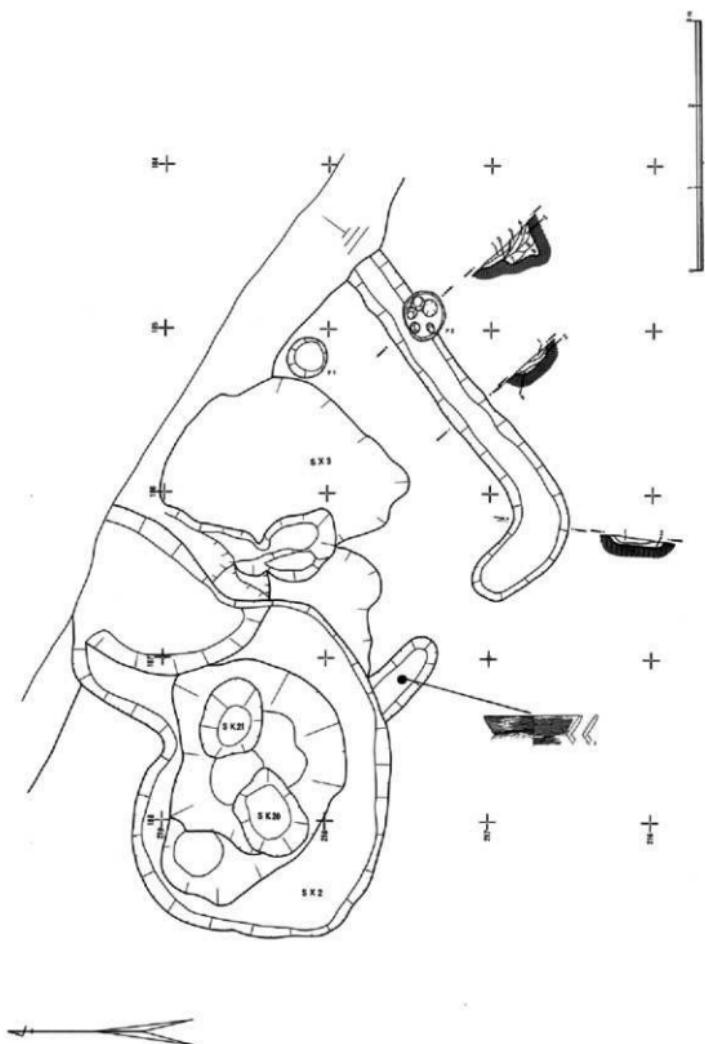
第138図 八幡原No.9 遺跡B区 2号方形周溝墓平面図



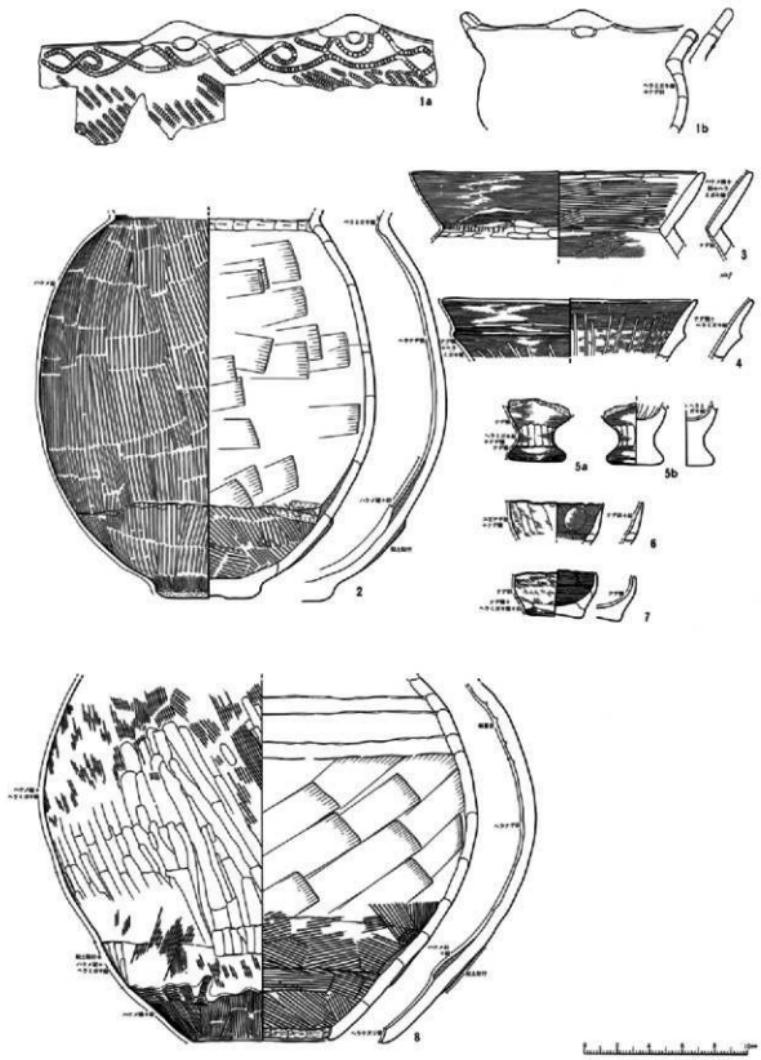
第13図 八幡原No.9 遺跡B区 3号方形周溝基平面図



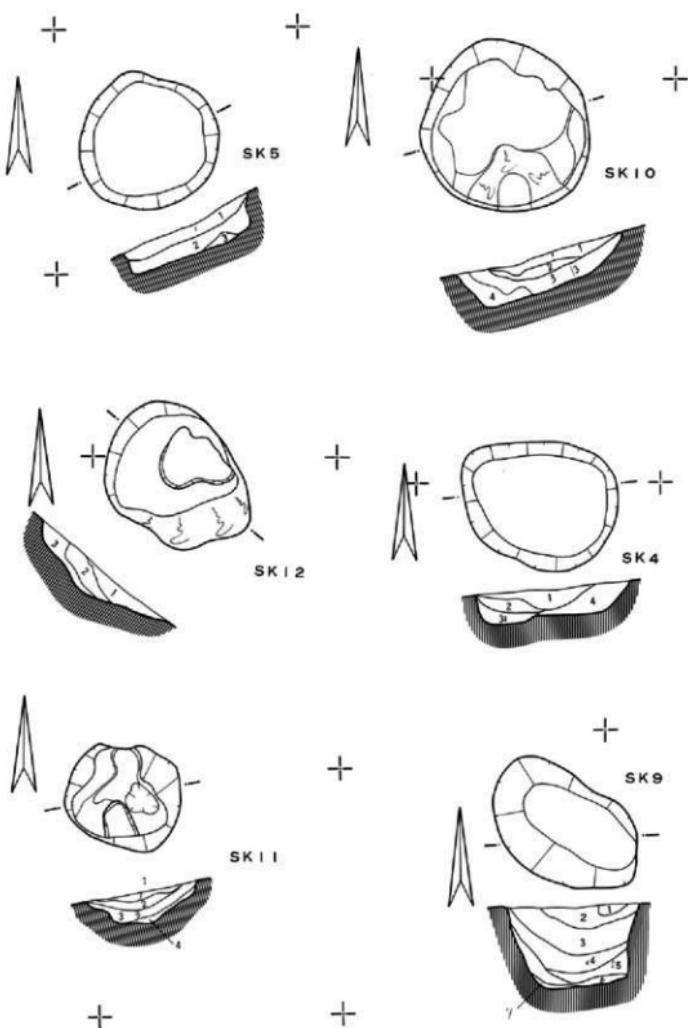
第140図八幡原No.9遺跡B区4号方形周溝墓平面図



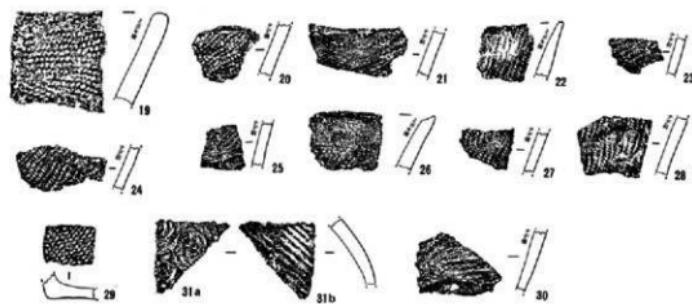
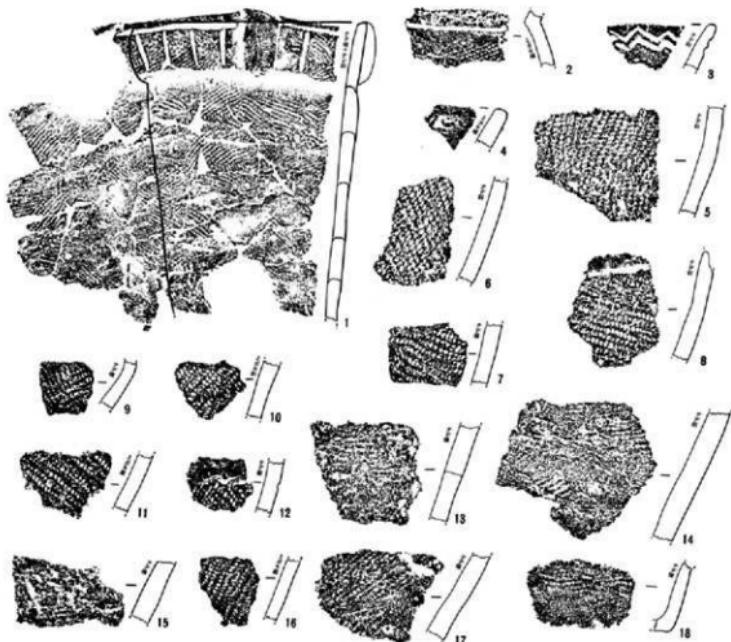
第141図八幡原No.9遺跡B区5号方形周溝墓平面図



第142図 八幡原No.9遺跡B区出土土器実測図

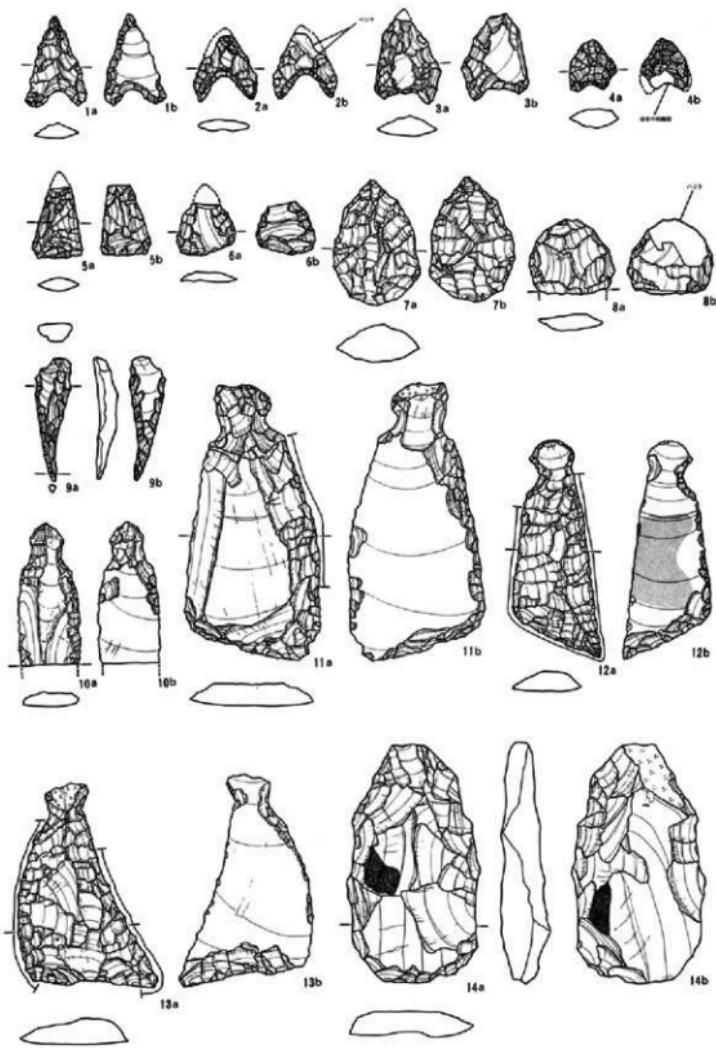


第143図 八幡原No.9遺跡B区土壤平面図

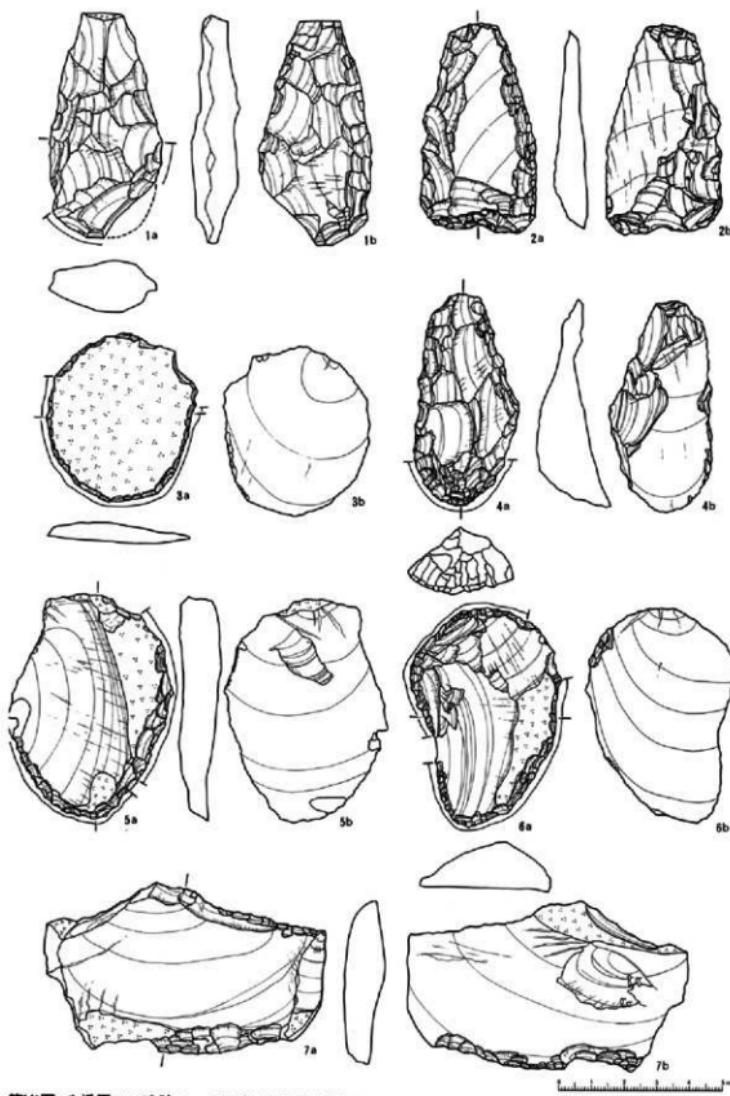


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31a 31b

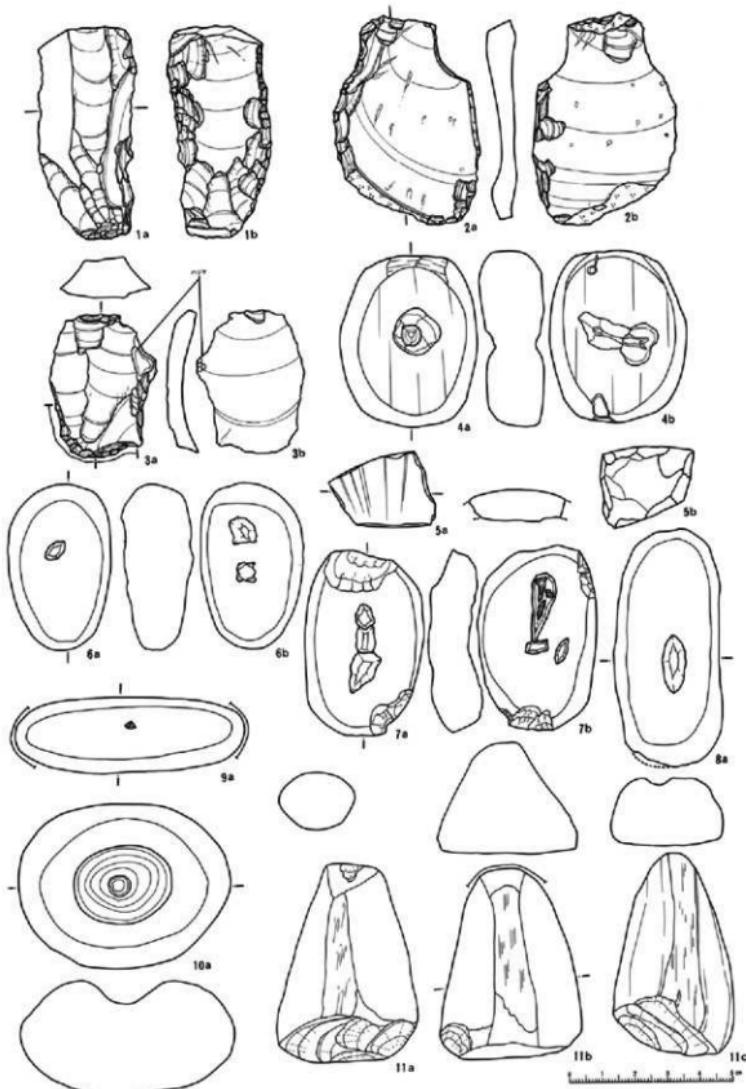
第144図八幡原No9遺跡B区出土土器拓影図



第16図 八幡原No.9 遺跡A・B区出土石器実測図(1)



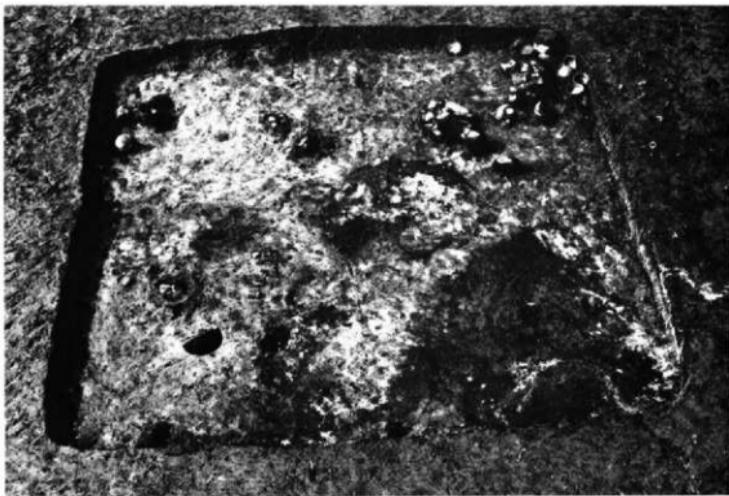
第14図 八幡原No.9遺跡A・B区出土石器実測図(2)



第147図 八幡原No.9遺跡A・B区出土石器礫器実測図

図 版

第一図八幡原No.5遺跡の発掘



▲B区ST2・遺物出土状況



▲同上近景

第二回版八幡原No9遺跡の発掘（一）



▲遺跡全景・堂森山から南を望む。矢印右がNo9・左がNo5遺跡



▲A区横状造構全景

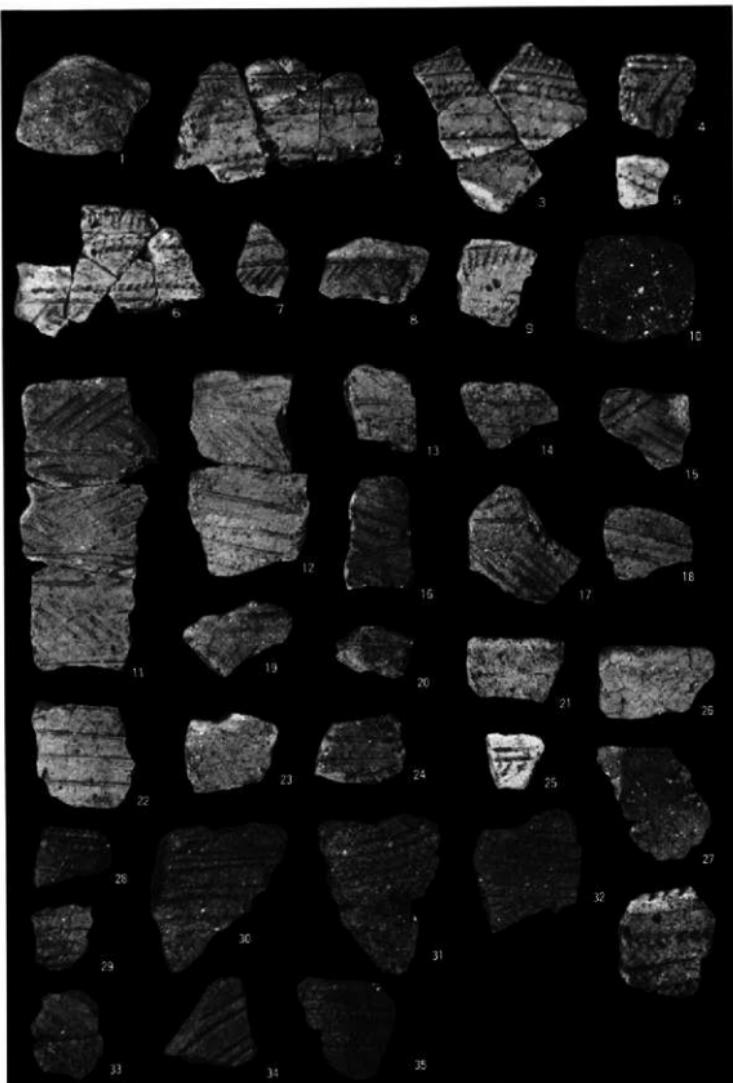


▲A区・1号方形周溝墓全景



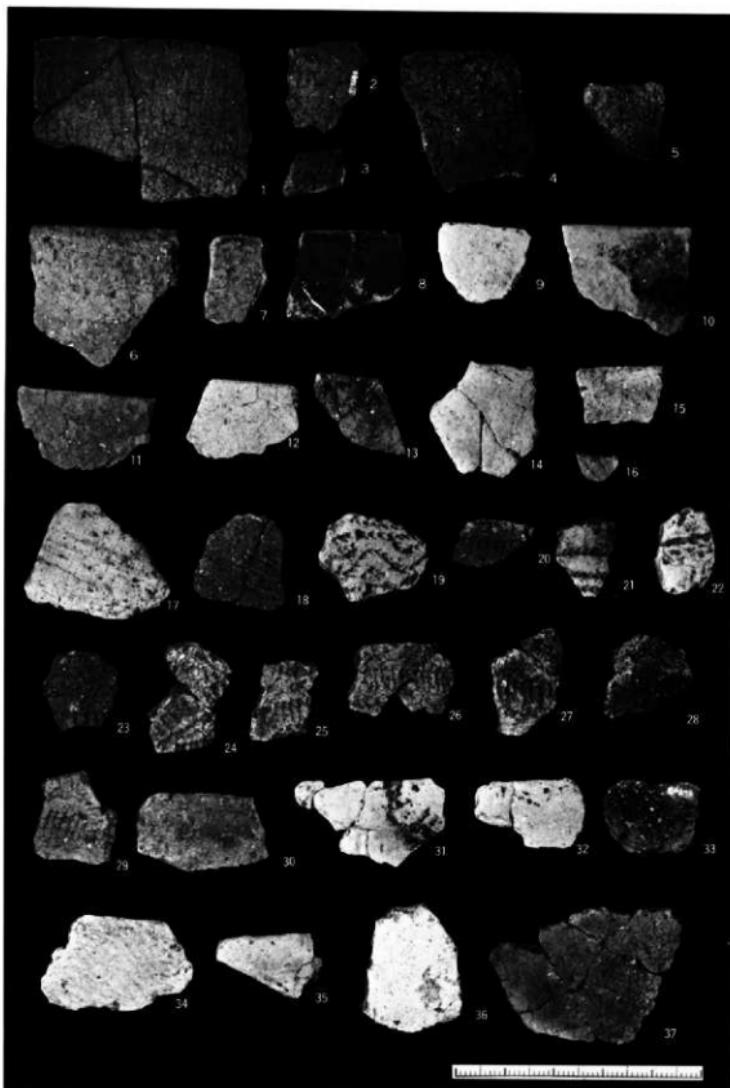
▲B区3号・4号方形周溝墓全景 手前が3号・後が4号

第四図版八幡原No.5遺跡出土の土器（二）



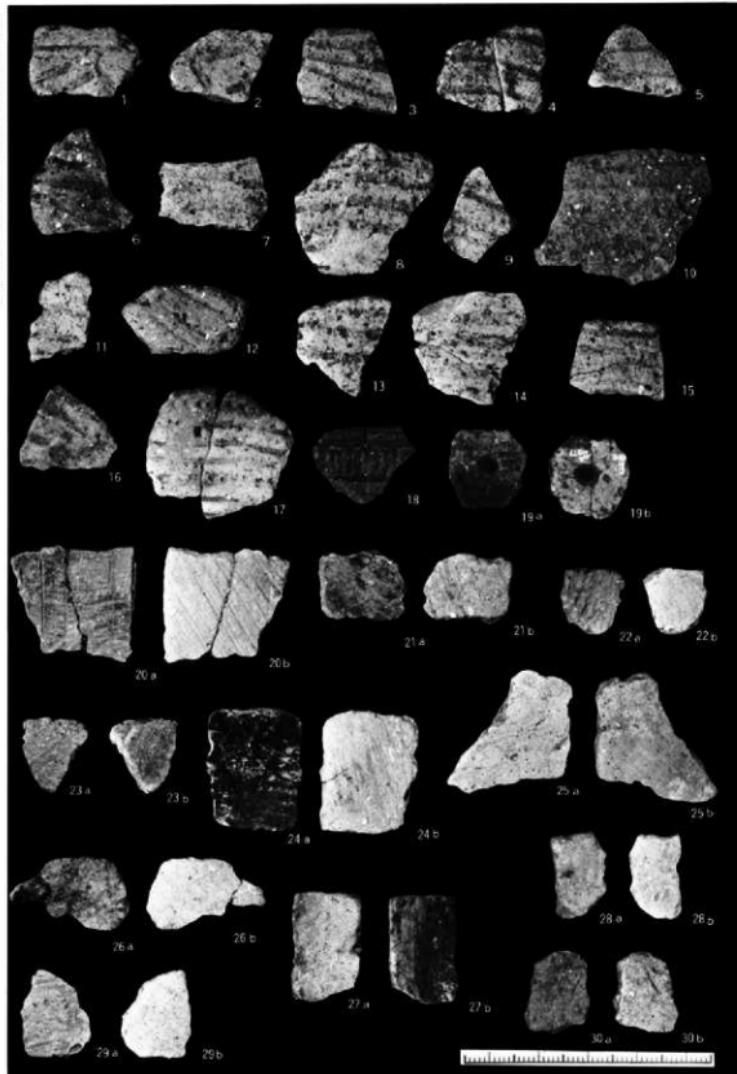
ST 1 出土 1~10 ST 2 出土 11~25 ST 4 出土 26~36

第五図版八幡原No.5遺跡出土の土器(II)



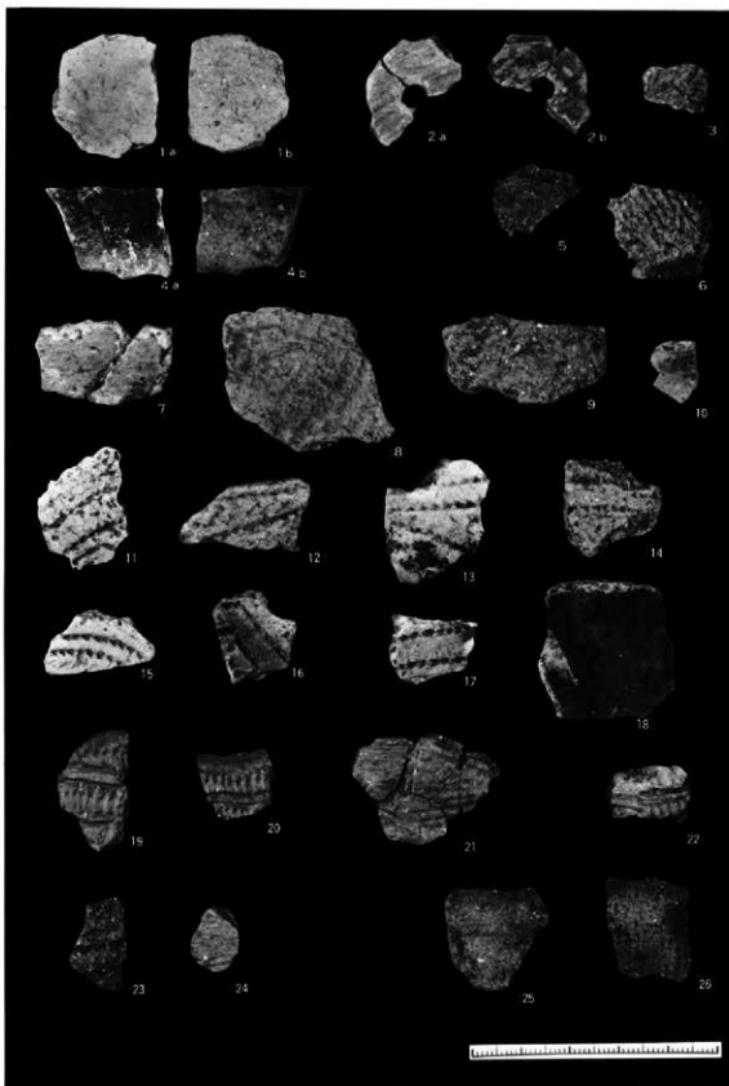
ST5出土1~16 ST6出土17~37

第六回版八幡原No.5遺跡出土の土器
(三)



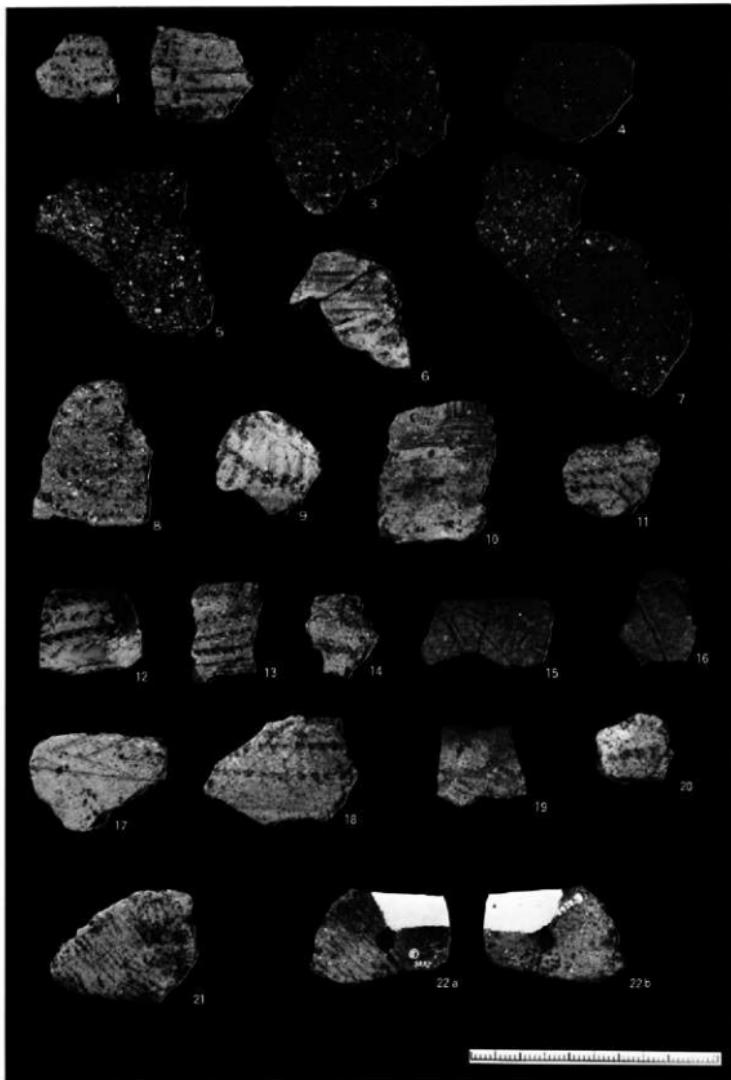
ST7出土1~19 ST8出土20~30

第七図版八幡原No.5遺跡出土の土器(四)



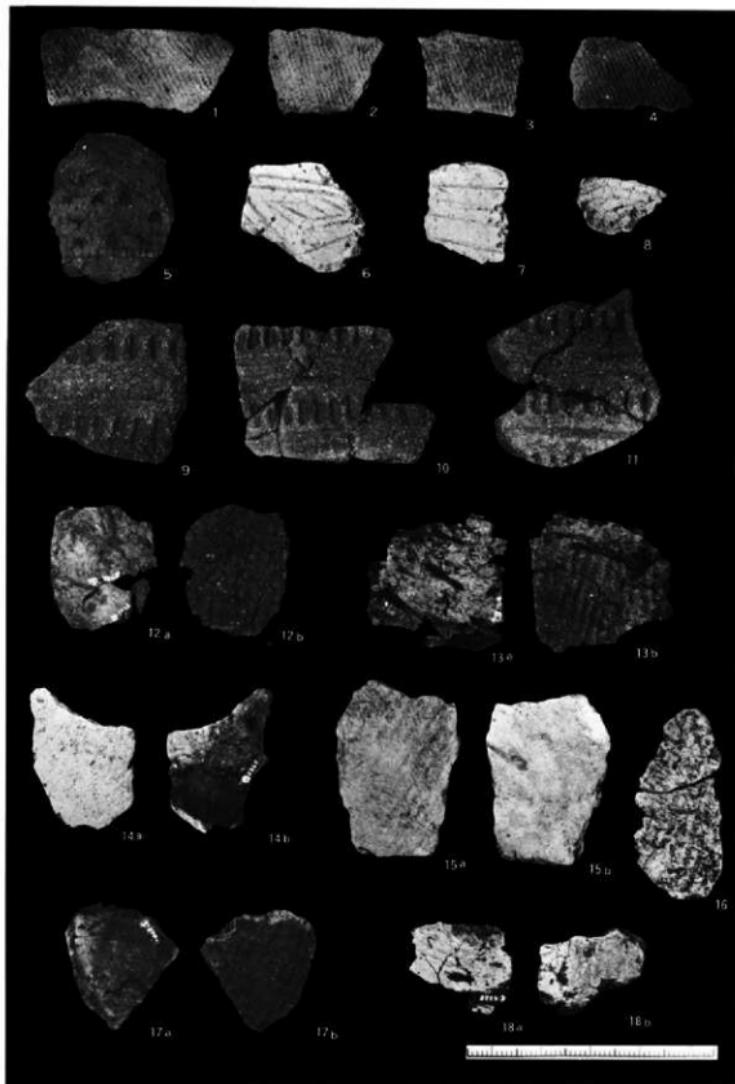
ST 8 出土 1~10 ST 9 出土 11~18 ST 10 出土 19~24 ST 11 出土 25・26

第八図版八幡原No.5遺跡出土の土器
(一)



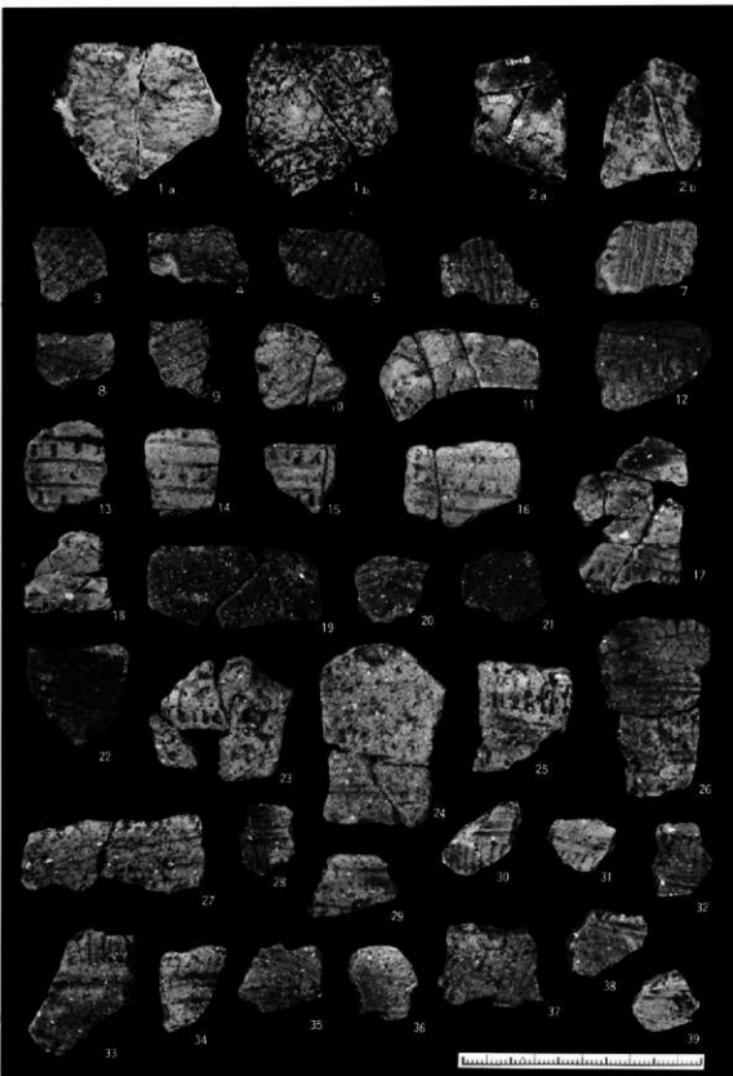
ST 12出土 1~7 ST 13出土 8~14 ST 14出土 15~20 ST 15出土 21・22

第九図版八幡原No.5遺跡出土の土器(六)



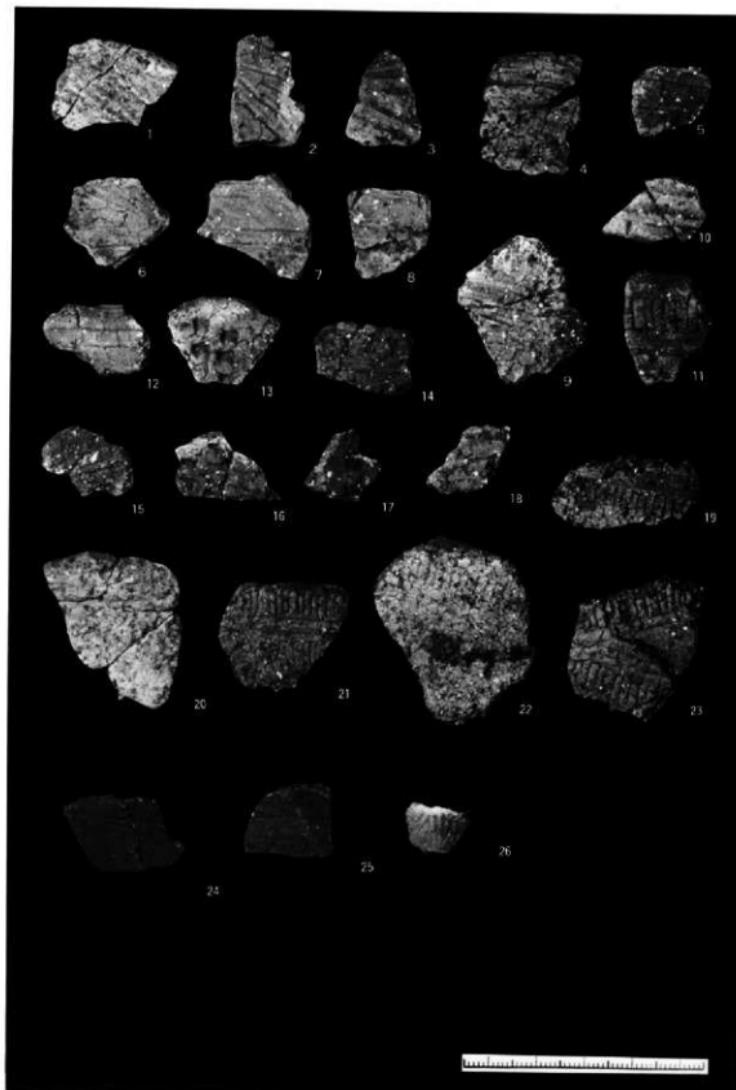
ST 16出土 1~18

第十四版八幡原No.5遺跡出土の土器(七)



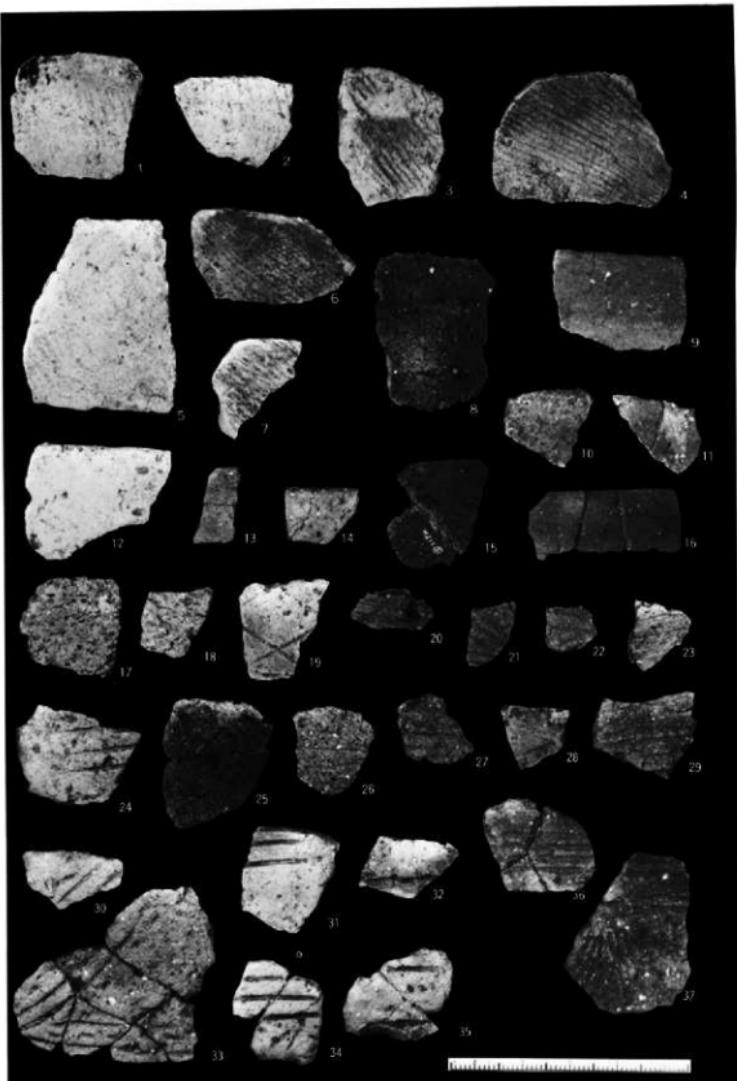
ST 16 出土 1・2 ST 17 出土 3~39

第十一図版八幡原No.5遺跡出土の土器（八）

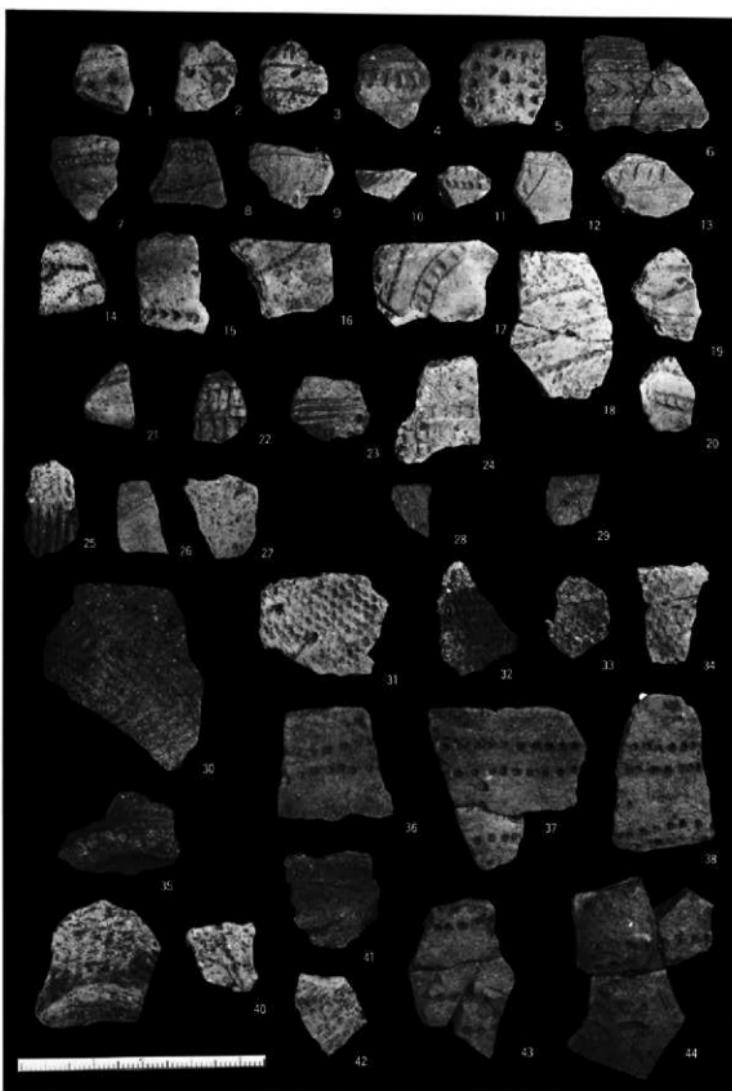


S T 18出土 1~23 S T 19出土 24~26

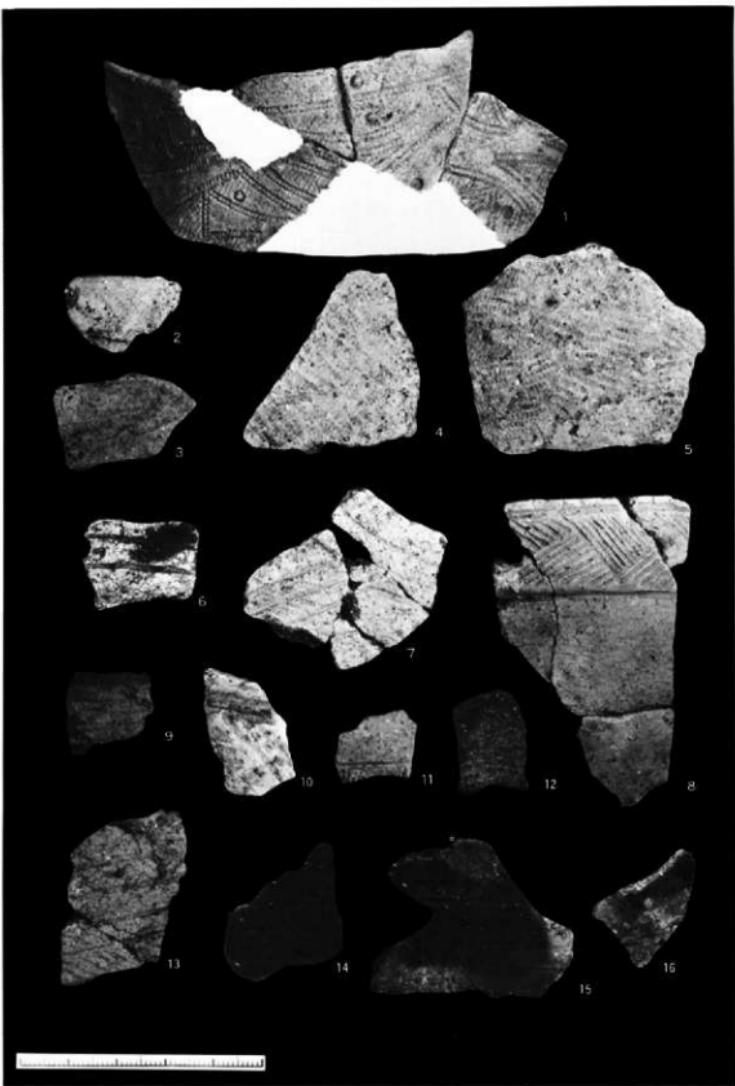
第十二図版八幡原No.5遺跡出土の土器（九）



第V層出土 1~37

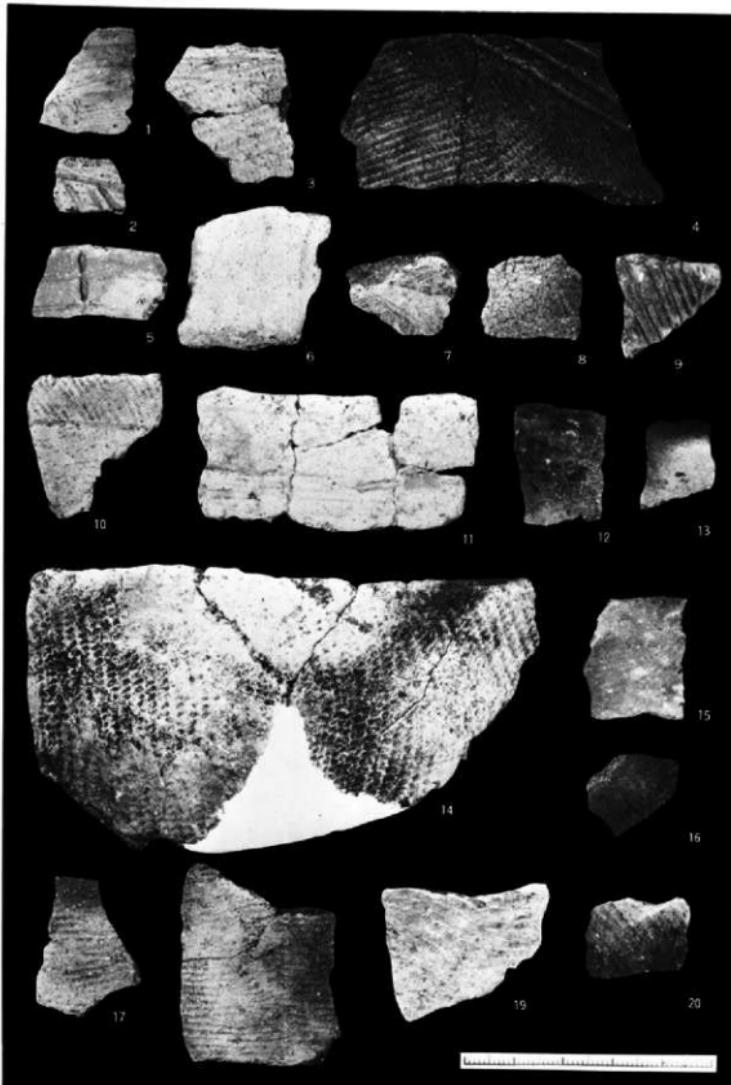


第V層出土 1~29 第V層上面 (IV層下面) 30~44



第IV層出土 1~5 第IV層上面出土 (III層) 6~16

第十五図版八幡原 No.5 遺跡出土の土器 (十一)



第IV層上面出土（Ⅲ層）1～20

第十六図版 八幡原No.5遺跡出土の土器 (十三)



ST I 出土 1~9